

一、惡澤

母馬はただ暢びりと歩いて行くに過ぎない、振り返るとか、呼んで見るとかいふことはしない、ただ軽い荷車をがらがら曳いて行くだけである。仔馬は放れたまま綱をつけてないから、かなり遠くまで走つてゆくと、立ち停つて首をかしげて母馬の方を媚びたやうに見る、そしてきふに、前脚を二つに折り首を地面にすりよせるやうにして、巫山戯けて見せるが、母馬の方はなにも感動のないふうをしてゐるので、仔馬はじれつたがつて、お尻を帆のやうに立てて、こんどは突然前脚をあげて

躍り上るやうに、つツ立つて見るのであつた。さういふ同じ姿整をつづけると、きふに母馬の乳房の方にすがらうとしたが、荷車の枠が邪魔をして乳房に首がとどかなかつた。おなじことを繰り返してゐながら戻かしがり、ふいに母馬のそばから放れて、道ばたの厚い葉をのこして細かい雑草をたべはじめた。何かそらぞらしげで、實際は少しもまぐさを食べたげな様子がないのである。乳房をふくめなかつた悲しいものを無理にまぎらはさうとしてゐるふうであつた。いかにも、厭々でただ雑草を口でむじり散らしてゐるといつた方がいい、雑草にはすでに霜に焦げた藍色の斑點がしみ出てゐた。

荷車はかなり遠くに隔たり、仔馬はやつと母馬のお尻だけが見えるやうになつても、依然、母馬は仔馬を待つとか、振り返つて見るとかしない、母馬には仔馬をつれてゐるのか、ゐないのかすら分らないふうであつた。仔馬はそのうしろを見てゐるうちに、突然、走り出して行つた。走り出してからはじめて、紛れてはならないやうな焦つた氣持になつた。やつと追ひ著くと乳房には縋り付かないで、こんどは

母馬とすれすれに顔を寄せ、母馬の蒸せるやうな匂ひをかき、口からも發しるお腹のなかの匂ひをかいた。そして仔馬はあんしんしたふうであつた。

母馬はやはり何にも言はず、首ひとつ動かさずに坦々たる沓掛の往還を行くだけである。時どき白眼を開けて母馬をぬすみ見しても、顔をすりよせても、そんなこととはとうにわすれたやうな冷然たる顔付であつた。仔馬はわすられた譯ではないが、母馬の注意力を促したくてならなかつた。仔馬は母馬の顔に自分の顔を打つけて見たり、脚にとまる蛇を趁つたり、時どきくやしげに無意味に道ばたの石を蹴つて見たりしたが、それも、母馬にはなんの感じもないふうだつた。仔馬は思ひ切つて細い痢立つたわかわかしい聲で嘶いて見て、永い間乾燥した野づらに喇叭なやうな聲を立てたが、それも、何の甲斐がなかつた。母馬には何の面白いことも、物に氣を付け注意するとか、仔馬と自分とすれすれに歩くといふことにも、楽しくないらしい物憂い沈み切つた様子であつた。仔馬は母馬とならんでばかばか歩いてゐるうちに、自分の足音にすつかり耳を奪られて、殆ど、睡りかけてゐるやうにのろのろと

歩いてゐた。ちよつと油断してゐると母馬の方が先きになり、氣がつくと仔馬はきまつて五六歩遅れてゐた。氣づいて馳け出すうちに又忘れてこんどは、すつと荷車からはなれるやうになり、仕方なく先刻とおなじい食べたくもない道草を、もりもり小高い道路際で薙ぎ倒しては食べてゐた。

馬子は道づれになつた男と栗拾ひの話をはじめた。道づれになつた男は百姓の間を互り歩いて、種物を捌きながら一俵に幾らといふ利益を取るわたりであつた。栗ひらひは山間では秋の非常に重大な食糧であつて、米一升栗一升といふ平均の價格がついてゐて、一斗の栗をひらへば米一斗を作つたとおなじ、みいりになるのであつた。だから提灯を點けて山の中にはいり、天明を待つて灯を消すほど朝早くでないと、他人に拾はれてしまふ心配があつた。男はだいぶ以前まで獵師をしてゐたので、栗の木のある澤の崖とか、栗ばかりが一廓をつくつてゐる屋根下とか、栗林が山の腹にあたる場所に繁つてゐて、御殿のやうに栗の實が地をしきつめてゐる處とか、さういふ栗の實のおちる天與の場所を知つてゐた。そこに毎日出かけて一日

に二斗くらゐ平均に背負うて、山を下り、すぐ村の入口の茶店でさばいてしまふと、翌日また山に入つて豫定の量だけ背負うてもどるといふふうであつた。たいてい九月の二十日から十月十日までの間だが、栗に遅いのと早いのがあつて、林は順を追つて分け入るのであつた。一升三十圓くらゐに卸して一日二斗で六百圓になり、二十日間で暴風雨の日をのぞくと大てい七八千圓の金になることは、毎年秋のはなやかなみいりであつた。

村でもあとを跟けたり話の尻をかけたりにして跟いて来るが、教へたことがない、家でも息子にも教へないのは人に喋られると、干あがつて了ふからであつた。も一つは、それらの栗林は悉く悪澤のまはりにあつて、山では澤は禁物といふ程道が途絶えてゐて、一步踏みまよふと、何處を歩いてゐても澤のまはりに出るやうになり、大抵、ここで夜明ししなければならぬやうに、悪澤がつらなつてゐる處だつた。悪くすると澤が瀧になつたあたりの密叢の中に、すり込んだり、瀧壺にはまり込んでしまふのであつた。息子にも教へないのは、かれが友達でも連れて行つて必然に悪

澤の餌食になることを、恐れたからであつた。かういふ悪處は自分の生涯だけでこれを知り、自分が死んだら此處にはいる人もないわけであるから、禍根を絶つて置きなかつた。しかも悪澤の水面には芝葦といふ、芝ではあるが芝でもなく、また、葦かと思れば葦でもない一種の浮芝が、處々浮いてゐてそれに足を踏み外せば、そのまま水底に沈み込んで了ふのだ、人奪りの浮島があるのだ、さういふ悪澤を知つてゐる者は三十年も獵をしてゐる自分だけであつた。秋になれば兎や猪を打つより栗の方がいいから行くが、ああいふ悪處は人間の行く處ではない。

栗ひらひは奥山のどういふ栗の木の下にも、人の足あとがあつて、此處にも人が來てゐるといふ驚きをいつもあらたにするが、さすがに、悪澤のほとりで人の聲とか足あとを見たことがない、此處は、普通の人間には用のない處であつた。栗ひらひが此處にまよひ込んだことを聞かないのも、此處まで拾ひに出かける必要がないからであらう、獵師は山を見ずにすすむといふが、栗ひらひは山をよく見ておかなければならなかつた。此處では栗は拾ふのではなく、枯木で作つた手箒ほうきで掃くので

あるが、幾ら掃いても掃きつくせるものではない。自分の咳をした聲に驚いて下山の時刻に近づくとき、さすが山の瘴氣が迫つて肌身が緊つてくるくらゐだ。毎年秋が終ると金がいふのはいいが、栗仕事は済んだといふ安堵と無事に秋が終へたといふ氣持でほつとするのであつた。いくら山を知つてゐても、金になりすぎる仕事だから危険な目に遭はなくて宜かつたと思ふのだ。獵ではどんな危険があつてもさう考へることはないが、やはり仕事はらくで金になり過ぎると、空恐ろしいものが感じられて來るのであらう、獵師の男は栗ひらひの話を永々としたあと、今年は一八千圓ばかりになつたので豚の子と、鶏とを飼つたが卵は相當の高値になるから、何の事はない執方向いても金にならないことはないといつた。

馬子はしじう聞き役であつたが、相槌を打つくらゐで何も話をしなかつた。馬子のまうけたものは馬の仔一頭で、しかも種賃にかなり取られた上、二頭生んで一頭は死んでしまつたから、たつた今走つて歩いてゐるあの仔馬一頭しかまうからなかつた。馬子は何となく獵師に向つて皮肉でも、厭がらせの心算でもないが、つい、

かういつて見た。

「おらもそんな山奥の寶の山に踏み込んで見よう、栗の木なら何處にでも生えてゐるべえに。」

「それもよいき、けれども山の奥でも人氣のない處へは入らない方がいいよ、おらのいふ惡澤でも、どれだけの人が夜明しして酷い目に遭つたか分らないくらゐだ。」先々年まだ戰爭中、小學校で、何處で聞いたのか、惡澤の栗ひらひに出かけたのはいいが、五十幾人も道に迷ひ込んで日暮れになり、やつと農林省の技師に見付けられて歸つたさうだが、さうなると栗拾ひどころではなく、生徒は一樣に青くなつてしまひ、霧でも下りたら夜明ししなければならぬところだつた。

「それさね、先生といふのがおらが出かけることを聞き嚙つて行つたんださうだが、肝腎の栗はみんなが、一握りしか拾へなかつたさうだ。」

獵師は小氣味好きさういひ、山だけは知らなかつたら登るものでないと、馬子を警しめた。

「けれども栗で一萬圓になれば、どんな仕事を打つちやつても出掛けたくなるね、おらの家には犬もゐるし、犬なら道に迷つても助けになるだらう。」

「犬は道を知つてゐても、引つ張つて行つてくれる譯ではあるまい。」  
獵師はさふに怨づいた馬子の心を汚ならしく感じたが、こんな話をしかけた自分の阿呆さ加減も氣になつた。しかも彼は人にあひさへすれば栗の話をしすにゐられないのも、よくよく念の入つた金まうけのうちでも、いつも、燦然とかがやいてゐる獨得のわざを人に話さずにはゐられなかつたのだ。

年ぢゆう、馬と一緒にくらししてゐては何もみいりといふものはない、たとへ惡澤のくづれに迷ひ込んでも、そんな豪快な利益があるなら栗ひらひをやる決心が募るばかりであつた。男の話すやうに二十日間で一萬圓近くなるとは、誰も氣づかず眼立たないみいりであるから、來年はその近くでもいいから連れて行つてくれぬかと何度も執拗く頼んで見たが、獵師の男は氣のない返事をするばかりで、しだいに話を栗ひらひの外にはづさうとしてゐるので、これはいくら頼んでも無駄であるこ

とを知ると、馬子は諦らめてもう栗ひらひの話はしなかつた。こんな、いま一緒に歩いてゐる變ちくりんな男が一萬圓といふ金を事もなくまうけてゐるのに、自分はまだ纏めて千圓といふ金もせしめたことのないくやしさに、馬子は横眼づかひで背丈の矮い猫背の獵師を小面憎く見やつたが、顔は下卑た顔立であつても、一萬圓といふ金高にはどんなに藻掻いて見ても、馬子の腕づくでは稼ぎ切れるものではなかつた。

仔馬はもう母馬には關はないで、づつと先きに行つてゐて、そこで例の食べたくもない道ばたの草をもぐもぐやり、荷車と馬子が近づいてゆくと、また、先馳りしていい加減のところ立ち駐つて、例のもぐもぐを續けてゐた。きらひな雑草は口の端で除け、柔らかい草ばかりをえらんでゐた。仔馬はまた馬子と車に追ひ付かれると根氣好く走つては、立ちどまつてもぐもぐを繰り返してゐた。仔馬のまはりは日に日に尾の赤くなる赤とんぼが群れてゐて、仔馬がうごく立ち、停まるとまたもとの草の上にとまつてゐた。走るとそのあふれを食つた道の二側の赤とんぼが、

一どきに驚いて立つので羽根のきらめきが日の中に美しい波をつくつた。遠くから見てゐると仔馬が紙きれか何かを撒いてゆくやうに、あとへあとへと赤とんぼが立つ景色がくり返されてゐた。馬子にはそんな景色はなんでもなかつた。ただ、あんな栗ひらひで一萬圓もまうけると聞いてから、氣が滅入りこんで、どうにも氣持の裁きがつかかなかつた。こんな種物屋の獵師の栗ひらひの百姓の手に、一萬圓もほつかりと落ちてゐることは、馬子には運のある奴と、ない奴との區別があまり鮮やかすぎるので、何處にいつたらかういふ儲けといふものの正體をうまく、裁判してくれる者がゐるのだらうと、そんなことを彼は考へ込んで、獵師にはもう口をきかなかつた。彼の手綱には母馬がそろそろ腹が減り出して來たのであらう、しきりに馬子の手綱を曳いては顔を馬子の手にすり寄せた。温かい女のやうな馬の口のあたりが、馬子の手で吸ひつくやうに押しつけられた。それは草が食べたいといふ言葉であるよりも、例のぶらぶらと野づらに鼻先をこすりつけて、草の匂ひや土の濕りや雑草の觸りまはを何となく、身につけたい遊びの願ひのやうであつた。それより最つと

馬子にわかつて来たことは、先きに行く仔馬をちよつと呼び戻してほしいことで、あれは何度も乳を呑みはぐらかしてゐるのであるから、それをこれ以上に繰り返してはあれの爲に宜くないと、鼻先の柔らかいところが、さう話しかけるやうであつた。ちやうど、この時はいままでになく仔馬は非常に遠くに馳り著いてゐて、そこで子供達にとりまかれて長い草を食んでゐた。それがあまり遠いので母馬の氣持をさびしく、はぐれたやうな感じにさせた。馬子には母馬の氣持がよく呑みこめてゐたから、獵師に向つていふよりも、むしろ母馬の耳の所でよく聞えるやうに、いつて聞かすのであつた。

「ではあれも可哀さうだから此處らで一服やるべえか。」  
車を駐めると獵師にはおかまひなしで、荷車を往來の邪魔にならないところに曳きこませ、母馬を車の枠から外して手綱だけを車の胴體に結びつけ、母馬が少しくらゐる歩けるやうな綱のゆるみを見せてやつた。母馬はやつと尾を喜ばしげに振つて見せ、ひひひーんと威嚴のある、輕はずみでない嘶きをひとこゑ、野づらの果に向

けて擧げた。その聲は草むらを越え、白い道路の上を馳つて仔馬の耳のあたりを掠めた時分、子供とたはむれてゐた仔馬の顔が突然こちらに向けられ、その耳はまつつぐに突つ立てられた。そして幾らか考へるふうであつたが、母馬が道ばたにやすんでゐることを見ると、尾をつツ立てて見せたが次にはもう出来るだけの速力と、脚のつづくかぎり母馬の方に向いて馳り出した。ふた側の赤とんぼは一せいに飛び立つて、日の中に數えきれないくらゐの赤い紐を曳き出して、仔馬のあとから砂埃が白じらと低く立ちこめた。

## 二、芳松記

芳松さんは夕方、旦那の屋敷に著いた。二里の山道は何でもないが荷物が馬鈴薯と南瓜だつたから、途中呼び止められはしないかと氣懸りであつたが、荷物はごく

少量だったからといふ安心もあつた。旦那の屋敷では大喜びで夕食が出るやら、お茶をいれかへるやら歸りの提灯の用意までしてくれ、芳松さんはこれで宜かつた、人の喜びも自分の喜びもみな一緒だといふふうで表に出た。馬は夕あかりのなかで溫和しく待つてゐて、芳松さんの顔を見ると待ち草臥れたやうに顔を掻げ、痒いところを掻くやうに芳松さんの腕のところ、顔をすり寄せておあいそをふり撒いた。待たせたあとにはきつとさうするのである。芳松さんは馬の鼻すちを撫でてやり、首と肩の間をぺたぺた餅のやうに叩くと、馬は眼をほそめて恐縮がつてゐた。きのふの朝、小屋のはめ棒を落してぶらりと出たあをは、そのまま畑に出て行つた。ちやうど、唐黍の熟れた畑のまん中に立つて、芳松さんの作つた唐黍をがりがり食べはじめ、馬でもわかるらしく、よく實のいつた唐黍から順に食べはじめ、あらかた食べ潰してしまつた。しかも、強い首すちで片ツ端から薙ぎ倒したので後始末も、容易な手敷ではなかつた。せめて十本くらゐ残つてゐるだらうと見ると、残つてゐる分は實のいらぬ平つたい唐黍ばかりであつた。腹はと見ると、さすがの馬の太つ

腹も、詰めるだけ詰め込んだあとの張つた工合は、爪も立たないくらゐの固さであつた。芳松さんはまだ今年の唐黍は一本も手を付けてなかつたので、少時、茫然として惘れ返つてつツ立つたままであつた。あをは、芳松さんの顔を見ると、慌てて反対側の豆畑をよぎつて厩に戻つて行き、ちやんと自分のゐる處に顔も入口に向けて、何喰はぬ顔で立つてゐた。芳松さんがはいつてゆくと、眼に極り悪るさうな白眼を見せ、てれかくしの心算であらう、板床の上に足掻きの音を二三度させて、お辨茶羅らしく首を長くして、芳松さんの肩先に乗せようとしたのであつた。芳松さんはこの野郎、何も知らんと思つてゐるのか、一本も残らず退治してしまつて今年はおかげでもろこしは買ひ込まなければならんぢやないかと、さういつて、あをの横面をひとつびつしりと張りつけたのであつた。あをは張り付けられて横に向いた顔をそのままに凝とさせ、もう芳松さんにお愛想はしなかつた。お愛想をしても、けふの芳松さんは許してくれさうもないからである。かくして、まぐさも晝は抜かれて夜に入つてから、やつと馬は遅い夕食をたべたのであつた。馬自身からも、芳



松さんからいつても、あんなに馬は叱られたことがなかつた。いくら畜生でも毎日畑に出てゐるくせに、自分の食物と、畑のものと區別がつかないやうでは、それこそ野良猫同様ぢやないかと、芳松さんはも一つ馬の横面をびしつと手のひらでたたいて云つた。もろこしが食ひたければ、畑の端から順序よく食つて、食はない分は何も鼻先で片端から倒さなくとも宜ささうなものだ。それを足の踏場もないくらゐにへし潰してしまひ、一本づつ丸ごとに食べればいいのに、半分囓りやがつてそれを投げ出して置いて、また別のあたらしい奴を半分食つて、また棄ててあつたぢやないか。少しの見境もない食ひ方は百姓の馬のすることぢやない、百姓の馬は南瓜も茄子も踏まないのが定法だ、全く愛想の盡きた野良馬だと芳松さんは罵つた。

けれど町に仕事に出て来たけふは、少しの澁りも、わき見もしなかつた。荷も殆どつけてゐないくらゐに軽かつたからもあらうが、それはあきらかに昨日のお佗びのしるししかつた。頭を肩に乗せてくるのも、手のひらを舐めようとするのも、みな、きのふを謝まる氣持の現はれしかつた。芳松さんはかういふ馬のこまかい

氣持を呑みこむと、仕方のない野郎だ、こんどは大目に見て置くが、このつぎに畑あらしなぞやり居つたら、それこそただちや濟まさないからといつて、鼻すちを芳松さんは優しく撫でてやつたのであつた。馬はすつかり落著いて平常どほりの芳松さんを見ると、一層、かれの肩に顔をすりよせては、何かをいはうとしてゐるらしい風であつた。恰度、車が間もなく六本辻に出ようとしてゐたが、この六本辻は何處から抜けて來ても、車なら一應この廣場に出て、それからあらたに道路をとるやうなたまりになつてゐた。芳松さんが廣場に出て、向ふ側の道路にはいらうとした時であつた。突然、唐松と低い灌木の繁から一人の男が出て來て、人を人とも思はない投げ遣りな調子で車のあとから呼び駐めた。

「おい、その車に用があるから待て。」

しかし轍の音のがらがらした響で聞えるものではない、男はやつとその事に氣がつくとこんどは車の前に出て、芳松さんの顔に食つつくやうな近さで呼んだ。

「待てといつたら待て。」

「何の用だんべ。」

芳松さんはこの男が何者で何の用事があるのか、處は六本辻であつたから、往きの車の荷を見て待ち伏せにしてゐたことが、直覺的に讀めて來た。

「荷物はどうした。」

「旦那の處に置いて來た。」

「馬鈴薯と南瓜だつたな。」

「さうだ、それがどうしたと云ふだ。」

「幾らで賣つた。それをいへ。」

「肥料のお禮にただ置いて來た。はじめからの約束だもん。」

「いまどき調法な口をきくな、ただで置くばかがあるか。」

「ちや行つて聞いて見い、本當か嘘か聞いて見い、一體、お前さんは何だ。」

「沓掛の駐在所にゐるおれの顔を知らんか。」

「知らん。」

「よく見とけ、村と名前とをいへ。」

「北佐久郡成木村、松山芳松といへばわかる。」

「幾歳だ。」

「六十二歳だ。」

「いい歳をしてゐて鬮賣をしやがる。明日調べに行くから待つて居れ。」

「逃げるにもお先祖からの土地は、南瓜で賣ることはできねえ。」

「吼面ホウメン極くな。」

ぐいと、肩先を衝かれた。また、夕明りのこの道路のほてりでは、どういふことがこれから初まるかと、芳松さんは自分が怖かつた。自分の短氣がふれて破れたらどうなる、それを遣りとほしたらどうなる、芳松さんは自分自身を警戒せざるをえなかつた。

「何する。」

「明日調べに行くからそのつもりで居れ。」

「明日でも明後日でも来い。」

ふと気がつくとも馬はのろのろと歩き出した。車はがらがらと乾燥したあたりに、聞きなれた親しい響を立てた。へいぜい車の音なんかにもつとも気がつかないのに、けふは軌りが悲鳴のやうに聞えた。芳松さんは馬の方に向つてどうどうといったが、馬は依然のろのろと歩いて芳松さんから隔れて了つた。

「もう用はないのか。」

「調べは明日だ、馬鈴薯は何貫あつたのだ、南瓜の個数はいくつだ。」

「藪かね、藪は十貫、南瓜は八個。」

「嘘を吐け、藪は十五貫くらゐあつたじやないか、十貫くらゐで荷馬をつけるものか。」

「いや十貫だよ。」

「強情な爺だ、十五貫とおれは睨んで置いたのだ。」

「十貫だよ。」

芳松さんはもう馬のお尻が見えなくなつたので、馬が放れた、馬が見えねえ、と、いつて馳り出した。刑事らしい男はそれと同時によく覺えて置けといつて、自轉車にまたがると反對の驛へつづく道路を走つて行つた。

馬はかなり隔れた道の二又になつた角で、ひとりでに駐つて待つてゐた。こ奴が氣を利かさなかつたら、悶著はもつと永く續いてゐたかも知らなかつた。馬が氣を利かしてはじめは分らぬやうに、少しづつ動いて行つたが、或る程度まで行くと些か早脚になつたのも、何か知つてゐてさうやつてくれたやうな氣がし、芳松は却々しやれたことをするぢやないか、お前がうごき出さなかつたらおらあの男と、どんなはずみから取つ組み合ひをはじめてゐたかも知らないといつて、芳松さんは馬の首すぢをぺたぺた叩いた。馬も褒められたことを知ると、低い元氣のいい聲でひところゑ嘶いてから、樂々と駐つて永い間かかつて尿をしたのであつた。尿の溜つたところに夕明りは早くも訪づれてきたが、あたりは、提灯なしに既う歩けないほど暮れてゐた。芳松さんは燐寸を何本もむだにした擧句、提灯にあかしの點けた。提

灯は車の枠に結び付けたままふらふら動いて、人通りの絶えた夜寒の街道に見えるがくれして行つた。

翌日も翌々日も警察の男は来なかつた。中三日隔いた朝はやく一臺の自轉車が駐ると、例の男は芳松さんの家につかつか這入つて來ると、異常な昂奮振りで嘸鳴つた。

「芳松の家はこちらか、芳松はゐるか。」

芳松さんは圍爐裏に坐つて楷灰に、栗の實を埋めて焼いてゐた。或ひは來ないかも知れないと考へてゐた例の男は、土間につツ立つてゐた。

「居ますよ。」

と芳松は冷然といつた。

「調べに來た。」

「何なりといはつしやい。」

「此間の落は賣つたにちがひあるまい、賣つたなら賣つたといへ。」

「賣らねえ、くれて遣つたのだ。」

「うそをつけ、落を十五貫もただでくれて遣る奴が當節ゐるか。」

「本當だから仕方がねえ。」

「正直にいへ。」

「これより正直になることは出來ねえ。」

「一體てめえはおれを何だつて考へてゐるんだ。」

「駐在所の巡查ぢやねえか。」

「それならありていに云つちまへ。」

「落はこやしのお禮に遣つたといつてゐるぢやないか。」

「まだ強情を云つてやがる。叩きこんでしまふぞ。」

「何處へでも持つてけ。」

「本當をいはないと張り飛ばすぞ。」

「どこからでも張り飛ばせ、ここはおらの家だもん、逃げかくれはしねえ。」

「ちや張り飛ばして遣ろ。」

「右からでも左からでもやれ。」

例の男は血相を變へた紫色の顔をして、飛びかかると平手で芳松さんの頬を滅多打ちにし、こんどは左の頬をひつばたいた。芳松さんは凝つとした不動のあぐらを掻いたまま、ふと二階の納屋の柱を見上げ、柱に打ちつけた一本の杵を眼に入れた。細い杵は古い柱に打ちつけてあるのですぐ眼立つ新木の明りを持つゐた。そこに此間まで鐵砲がかけられてゐた、それは召し上げられたので既うなかつた、芳松さんはじつと空らの柱を見上げた。頬打ちはなほ左右につづいたが、男の荒い息づかひがふうふう耳を打つて來た。あそこに鐵砲があつた。おらの鐵砲があつた。鐵砲は冬の食ひものを打つたためにおらの永い間の友達であつた。

「氣が濟んだか。」

「まだいひ居るか。」

びゆんと來た。鐵砲があつた。おらの、友達の鐵砲があそこに掛けられてゐたの

だ、だが、もうなかつた。おらの、おらのいのちをかけた鐵砲がなかつた。芳松さんは突然家ちゆう割れるやうな聲で、わめき立てた。

「おらの鐵砲はもうねえ。」

「何だと、……」

男は突然のことで芳松さんのいつたことの、その意味がわからないふうだつた。おかみさんや娘達は鐵砲と聞くと一どきに納屋二階を見上げた。その顔色は瓜のやうにつやのない眞青なものだつた。芳松さんが鐵砲を持ち出したらどうなるかが、驚くべき咄嗟の問題となつてみんなの眼色にあらはれた。しかし、その鐵砲はもう柱に掛けられてなかつた。

「いまいつたことをもう一度いつて見い。」

「何度いつたつて同じことだ。」

「おれを莫迦にしたことを吐し居つたのだらう。」

「ふん。」

「ふんとはなんだ、ふんとは何んだ。」

芳松さんはもうこれ以上、人間の手ではたききれないことを、相手の手のつかれを知つてゐたのだ、却つて芳松さんよりも、男の手のひらが痺れるくらゐ痛んでゐたらう。芳松さんの口の端には、はたで見えてゐて分らない微かな笑みがもれた。善良な芳松さんはもう叩かれるほど氣持に張りが出来て、ここより一步も抜かず、あやまる氣持など恬として起らなかつた。何時の間にか村の衆が集つて來た。誰一人として手出しをして芳松さんをたすける者がゐない。みなこの男の後のたたりに怖毛が立つてゐるのだ。誰がかういふ制度と慘忍とを永い間に、ここまで來てさせるやうにしたか、誰がこの男に頬打をゆるし、それを平然とやらせるやうにしたのだらう。

「あやまれあやまれ。」

と村の衆は芳松さんをなだめた。

「あやまらねえ、こやしと代へた蒔に金輪際間違ひはねえ。」

「まだ吐すか。」

「おらは六十二歳だ、おらはこれほど打ばたかれたことはねえ、おらは何時かはけふのことを誰かに話しなければならねえ、その話をする人を待たなけりやならん、あてのない人間を待つてみんな悉皆聞いて貰はなければならねえ、さあ、もつと叩け、氣の済むまで叩け、おらはおらのけふのことを話して見る、偉え人にあふまで忘れねえだ。」

「あやまれあやまれ。」

蛆のやうな聲が芳松さんの耳をなぶつた。芳松さんはあやまるわけがなかつた。偉い人とあふまで我慢しなければならなかつた。

「てめえのやうな闇をやる奴がゐるからみんなこまるのだ。」

「闇なぞしたことがねえ、闇をして物を賣る奴が、馬車で南瓜や蒔をはこぶもんか、闇なんぞしたことはない。」

「あそこの家も調べるからさう思へ、さうすりやみんな解ることだ。」

「あそこも調べて見い、調べて見たらおらの正しいことがわかるだらう、そして  
らおらの頬のゆがんだのをどうしてくれる。」

「そんなこと誰が知つてゐるもんか。」

「あやまれ。」

「あやまれ。」

「あやまるもんか、けふのことを聞いて貰ふ人にあふまであやまらねえ、その人  
があやまつていいかどうかを裁いてくれる、それまではあやまらねえ、偉え人にあ  
ふまで何も彼もあやまらねえ。」

「偉い人つて誰のことだ。」

「誰のことだかそんなことが分るもんか。聞手のあるまで誰にもおらにだつて分  
らねえのだ。」

「何をこけを吐すのだ。」

「とつさんあやまれあやまれ。」

「あやまるもんか。正直にくらしてゐる人間が、人助けにとどけた諸と南瓜が何  
の悪いことがあるものか、六十二歳の年寄を打ち折監する人間がよいか悪いか、そ  
れを一體誰が許したのだ。」

間もなく男はくやしきうな顔付を持つて行きどころなく怒つて、土間に下りてか  
ら云つた。

「そのうち呼び出しが來たら出て來い。」

「何時でも出て行く、おらは先祖から死ぬまで此の土地にゐるのだ。」  
間もなく男は去つた。

小時して芳松さんはぶらりと裏の畑に出て、晴れた空を見上げて人參を五六本抜  
いだ。畝川で泥を洗ふとのつそりと甕かまの前にははれ、黙つて人參を馬の口のはた  
に持つて行つた。馬はもぐもぐと米にはげる人參を旨さうに嚙かり、尾を扇のやうに  
ひろげてばつさりと、しつこい虻を打つた。青い虻が一疋板の間にころがり落ちた。  
芳松さんは何本もおなじ口に持つてゆき、楽しさうにもぐもぐ食べるのを眺めた。

しかし芳松さんの顔色は、まだ、もとのやうな穏かな顔色に戻りさうもなかつた。かれはけふの不當な出来事と手痛さについて、誰かがかれの納得のゆくやうに言つてくれる人があるやうな気がしてならなかつた。

### 三、迷宮

町すぢは城を中心にした一本の大通り以外は、悉く錯然として迂曲された細かい小路風の町からなつてゐた。細かいといつても、それは一町と續かない町が突然土塀に打つかつて、二つに折れたり、また、急に折れた弓なりの町がほんの少しの鍵型の状態になり、さらにその鍵型が四辻に別れる廣場のあたりで、どちらに行つても行き止まりになるやうな、袋小路になつてゐた。その行き止まりに抜け穴のやうな小路がついてゐて、そこから、突然、長たらしい欠呻の出るやうな、ひよろひよ

ろした狭い町通りに出られるやうになつてゐた。だから人びとはその迷宮のやうな町にまよひ込んでしまふと、何時の間にか、もと歩き出した町にまひ戻るやうになり、そこから、あたらしく家を探ねるために出直さなければならぬやうになつてゐた。家の形や土塀や狭苦しい小路はどれも同じ恰好に見えるので、ことさらに迷宮の感じが深かつた。これらは築城當時、三百年くらゐ前に敵のそなへのために、わざと踏み入つたら出られないやうな格子縞のやうな町を作つたものらしかつた。土地を知つてゐる者なら眼をつぶつても歩けるが、他の土地から旅行して来た人には、いまでも町すぢが分らず、たうとう家を探ねられなかつたといふ人が多かつた。

まだ兵營といふものがあつた頃に、演習の馬が海岸とか野原から、演習の休みの時に、そつと抜け出して、逃げ出すことがあつた。馬でも演習が嫌ひなのがあると見え、長い二里もある往還の道をただまつしぐらに馳つて行くのである。行く先はいふまでもなく兵營の、厩の濫かい藁床でほんやりしてゐるのが、楽しく嬉しいのであらう。馬は通行人を道路のわきに片寄せ、車を駐め、川を渡り、子供らを吹き



飛ばすやうに馳りつづけた。だが、決して人を蹴飛ばすやうなこともなく、通行人が知らずにぼんやり歩いて居れば、そこを避けて傍をすりぬけて行くのである。町の人にはまた馬がいやがつて逃げて来たといつて、別に珍らしくも思はない、お天氣さへ宜ければ郷愁を感じる馬は、どんどん逃げて来るのであつた。ただ、馬はどうしてあんなに細かい町すちを知つてゐるのか、次から次へと町を抜けて行くやうに見え、人びとは一應感心するのであるが、實は然らず、馬はこの迷宮の小路に一たん這入りこむと、馬自身も迷ひに迷つて折角馳りつづけて行つても、行き止りになると突然並み脚になり、しばらく考へるやうなふうをし、變にさびしさうにくると後ろ向きになつて、もと来た道をもどつて行くのである。戻つて行く通りでまた迷ふと、あつち行き、此方行きして、風の筋を耳で知り、方向をさぐるやうに町角に立つて耳をそびやかしてゐることがあつた。そして、そんな時に、きまつて或る何秒間かの時間がすぎると、かれの頭に何物かがとほり過ぎたのであらう、突としてその町なら町を一生懸命に馳りつづけるのであつた。そんな時、不思議にかれば

何時も川べりをさぐり當てた。川べりにほかつと浮び出ると、川べりの土手に見覚えがあるらしく、流れにそつて今度はすこしも迷はずに馳り續けるのだ。上流に兵營があり、馬はいつも川にそつて海岸の演習地に下つて行くのであるから、まつすぐに返ることが出来るのである。秋晴れの大通りをこんなふうにして馬は毎日のやうに、兵營にかへつて行くのである。

馬といふものは凡ゆる動物の間でも、私はなかんづく嫌ひであつた。馬を見ると避けてとほるし、馬が往來にゐると少しくらゐる遠くても、廻り道をするくらゐであつた。先天的に嫌ひなのである。顔の長いのもいやだし、やさしい眼に表情が乏しく、横眼で見られるとことさらにいやであつた。處きらはすに尿をするのも、糞をすることも、巨大な腹も好かなかつた。遠くで見るのはそんなでもないが、近づくと鈍感な肉體的な重さがすぐ頭に來て、好く氣にはなれなかつた。さういふ嫌ひなはずの馬が、家の近くの垣根などに繫がれてゐると、私はそれを永い間眺めてゐた。それはどの部分に感心してゐる譯ではない、實に漠然とこの生きものが物もいはず

に、おとなしく繋がれてゐることに感心するのである。生きるといふことには肉體が必要であつた。馬は巨大な肉體を何の必要からあかも、大きく作らなければならなかつたかに就いて、私は何時までも、實に茫然と立つて見るのであつた。ことに、夕かたなど町家のすみで凝と首を垂れてつながれてゐる馬を見ると、あはれであつた。文學的にはいつもあはれな感じはあつたが、手でなでて愛撫する氣にはなれなかつた。脚で蹴るとか、肩先きに噛み付くとかいふことも、馬は豫告なしにふいに遣るらしく、馬の横をとほるとき、用心深く避けるやうにして行くのも、この不意に起る馬の發作が怖いからであつた。それに口つきがいつも泡でよごれてゐて、他の動物のやうに美しくなかつた。私は子供の時から巨大なからだをしてゐる馬が、はだかのままでゐることに何やら不自然を感じてゐた。象も牛もはだかであるが、馬ほど露骨な裸體ではなく、どこか著物をつけた感じがあつた。虎や獅子や猫には、立派な著物をつけてゐて裸體といふ露骨な感覚がなかつた。毛はみぢかく、肉體があらはれすぎてゐる馬の、おしつこをする時にそれを見て、何か悲しいものを餘り

にありありと見せられ、きたない佻しささへ感じた。見なくともいいものを見た感じは、そのまま自然である筈なのに、私はそこに遂に失はれた禮儀といふものに直面するのが、つねであつた。かういふ私の感覚には絶えず物事を比較して考へてゐるくせがあるのであるかと反省して見たが、その意味も含まれてゐない譯ではない。だのに、この途方もない失はれた禮儀について私の顔はいつも曇められるのである。これは無理であり不自然なものであらう、だが、私の感覚はそれにも拘らず何時も悲しいものにそれらを見るのである。

私の親戚の者で砲兵が一人ゐた。かれは馬の尾で懷中時計の被ひをつくり、時計の皮のやうにそれを服の中にしまひ込んでゐた。馬の尾にも白と黒とがあるらしく、たくみに編み合せてゐたが、時計の紐にも尾の毛をつかつて、恰も鎖のやうに編んで持つてゐた。私はたつた一度きり子供の時にそれを見たり、馬の毛であんだ時計の被ひと紐とを見たことがなかつた。兵隊はひまだつたから、そんな物をつくつたのか知れない。

#### 四、病馬

谷川ではあるが、雨がふらないと、平常は枯川になつてゐて、處どころに清水が湧いてゐた。兩側に町に近いので氾濫期の用意に、セメントで固めた石垣が立つてゐた。そこへどうして馬を下ろしたのか、馬子は馬を洗つて上らうとして、石垣の上から綱で引き上げようとしても、馬は首を振り向けて誘ひに乗らなかつた。右を曳いても、左を引張つても首を振つてゐて上らなかつた。どんなに脅かして嘔鳴つても、馬はいやさうにして動かない、馬子はこんどは反対側の石垣から同じ仕草を續けて見たが、やはり石垣にかけ上らなかつた。石垣は急流に變貌する谷川であるから、いくらか、斜面を取つて作られ、二間くらゐしかないから、馬ならば馳け上れさうなものだが、がれは何が氣に入らないのか、どんなに叱られても、上らなかつた。

若し上らないとしたら、川つづきを三四町ばかり下つてゆくと、平地とすれすれになつてゐる處があり、其處まで下つて行かなければならなかつた。川原つづきの磊々たる巨石もあつて、そこまで行くのは、馬子に取つてはあたらしい仕事かふえたやうなものであり、そんな手間を踏みたくなかつた。だから、馬子は手綱で殴るふうをして見たり、嘔鳴り聲をあげたり、水を打つかけてたりして見たが、事態は益々馬をこじらせ、いやがらせ、意地を通らせるばかりであつた。しかも、積荷の川原の石の用意が出来てゐて、石積み人夫は急がしはじめた。けふちゆうにあと三車は立てなければならぬ、三車はもう立つまいが、二車は立てなければならなかつた。

「親切めかして仕事に水をつかはせるから圖に乗つたんだよ。」

人夫の一人は甲斐のない馬子のお愛想を笑つた。

「水でもつかはせれば元氣が好くなると思つたんだが、どつちにしても、けふは奴さんの機嫌が宜くないんだ。」

馬は朝からのろのろとして意表に出ることばかりをやり、馬子と呼吸があはなかつた。どこか、からだが悪いのではないかとも見られたが、脚さばきには些しも草臥れが見えなかつた。

「毛もつやつやしてゐるぢやないか、あいつ猪いんだ、そんな石垣くらゐ譯なく越せるんだ。」

「氣が向かないんだな、」

「氣の弱い馬方だ、もつと手強くつかはなけりや馬に呑まれるぜ。」

馬子は氣が弱いといはれたことが氣になり、手荒く手綱を引いてみたが、もう甲斐がなかつた。馬方は仕方なしに下流へ下りて、その平地から上ることに決めて、馬を下流に引いて行つた。脚もとを見やがつてたうとう自分の言分を通しやがつた。ここで、がりがり荒立つたつて何にもならないが、平地に上つたらうんと引ばたいてやる、と、馬子はいつたが、石積人夫らはあとでがらから笑ひこけていつた。

「あいつ素人のくせに馬を使はうとするから間違ふんだ、馬方が休んでゐたら、」

仕事も休めばいいのに、目先の金に急ぎやがるから、どちを踏みやがるんだ。」

「あれだけぢや濟むめえ、えらく馬をこじらせたぢやないか。」

「積荷が濟んでからもあの畜生め動くものぢやねえ、すつかり呑みこんでしまつてゐるから、夕方までかかつて、一車も覺束なかんべえ。」

「何が氣にいらなんだ、別にむごい扱ひをしてゐねえぢやないか。」

「平常のあつかひがいけないんだ、平常から可愛がつてやらないから、かういふ時にはああ出て來るのも馬の性分だよ、いざとなつて水洗ひしたつて何になるもんか、うんと働かせてぎぶつと行かなきや行水の有難味も利かないさ。」

馬子は下流から土手づたひに馬を曳いて來たが、馬はけろりとして些しもからだの悪いやうなところが見えなかつた。荷石を積みはじめ、いざ行かうとすると、果して馬はうごかなかつた。どれほど嗚鳴つても、うしろ退きりをして前の方にはちつとも動かうとしなかつた。先刻の人夫はそれ見ると、馬のことは馬子より詳しいらしくいつた。

「言はないことぢやない、かう來ると思つてゐたが圖星が當つた。」  
「どうどう。」

新米の馬子は悲しさうに嘔鳴つた。此處でごてつく仕事のはこびがつかず、秋の日ざしは山中のことゆるゑ、傾き出すと黒幕を切つて落すよりも早かつた。

「一體何が氣にいらぬんだ。」

馬子は叩けば叩くほど頭であふられるばかりで、脚はがたつとも動かなかつた。

「もう動くものぢやねえ、半殺しにしたつて動くものぢやねえ、眼を見る、だいぶ逆上せてゐる。」

眼にあかみがさしてゐた。故意に動かないことだけは、誰の眼にもあきらかに讀み取られた。

「どうどう、畜生どうしてくれたらいいのだ。」

馬子の顔も紫蘇の葉のやうにいきり立ち、車につけた大スコップを振り上げて見せ、こいつでがんと行けと息をせいでいせいでいつた。馬は飛び上つて驚いた

が、かれの強情はそんなことで、まつすぐに伸びるものではなかつた。巨大な腹の中でもう動かないことを、すつかり決めてかかつてゐるやうに脚は地面をはなれなかつた。

「どうどう。」

先刻の人夫は土手の上に腰をおろして、投げ出したコロの棒を足の先でころがしながらいつた。

「駄目、駄目、日が暮れたつて動くものぢやねえ。」

「どうどう。」

「脚を見る、浮いてはゐるねえ。」

「畜生どうどう、どうしようといふんだ、動かなきや動くやうにしてやる。」

馬子はたうとう怒り上つてスコップを振り上げると、その背中の方で馬の尻を一つかあんと打叩いた、一つ叩くともう馬子は次から次へと、叩き付けなければならぬそれ自身の鼻奮からわめき立てた。先刻から比較のおとなしさうに見えた馬

子は、もう、馬なんぞどうなつても關はず、人間としての威力を示すためにそれを多くの人びとから選ばれたやうに、嘯鳴り立てた。

「これでも動かねえか。」

があんとスコップの背中は鳴つた。馬は飛び上がることに車もつれて、持ち上つてがたんと下ろされた。

「よせ、死んだつて動かねえ。」

「半殺しにしてしまふ。」

「よせ、千倆だつてかへねえ馬を不具にしちやいけない、生きものだ、いつも機嫌が好くないわけぢやない、ちよつとくらゐ待つてやれ。」

「またれねえ、日が短かいのだ。」

馬子はまたスコップを振り上げた。馬は飛び上がり、悶えて車をがつがつ後ろへ引き、また前にのめらせ、左右に捻ぢ向けて苦しがつたが、もう、前へは一步も出なかつた。かれの頑迷不靈な信仰に似たやうなものは、スコップで打擲される度合

が深まるほど、固められて行つた。

「歩け畜生動け畜生。」

馬子の聲はもはや正氣ではなく、半狂亂の聲を帯びてゐた。

「てめえ馬を殺す氣か。」

人夫は堪りかねて土手から起きて、息をつめた叱るやうな太い、低めな聲で壓すやうにうめいた。

「殺す氣はねえ、しかし殺したつておれの馬だ、おめえの世話にはならねえ。」

「さうぢやねえ、一諸に仕事をしてゐりや馬も仲間だ、仲間になつてゐるやうなものだ、それをスコップで叩くといふ奴があるか、見る尻を、」

馬の尻はすでによごれた血のあとを、深紅色にそめてゐた。

「スコップで叩かうが何で叩かうが、誰に遠慮があるもんか。」

「馬には馬を叩くのに鞭といふものがあるぢやないか、スコップは鞭ぢやねえ。」

「鞭とか椽とかそんなものは、どうでもいい、奴の動くやうに打叩けばいいのだ。」

「馬に傷をつける馬鹿があるか、馬に傷を、馬は大切にしていやるもんだ、てめえにそれが分らねえのか。」

「これくらゐの傷が何だ、てめえは利いたふうなことを言ふね、てめえはおれに雇はれてゐるのだ、それなら黙つて見てゐろ、おれのすることに嘴を入れるな。」

「雇ふも雇はれるもあるか、馬一つつかふことを知らない新米野郎が、おれさまを雇つたつもりでゐるのか、馬を見ろ、馬のつらを見ろ、殺されたつててめえの言ひなりにならない決心を見せてゐるぢやねえか、耳を見ろ、耳はおれのいつてゐる言葉を凝つと聞いてゐるんだ、仲間が馬の味方になつてゐることを知つてゐるんだ。」

先刻からあれ程冷然としてゐた人夫が、馬をいたはらうとは、馬子自身ですら、ふしぎに變つた氣持のあらはれであることに氣づいた。こいつは馬鹿な人夫でないことは分つてゐたが、こんなに物わかりのいい男だとは、馬子をはじめて知つたのであつた。けれども、彼はさういふ解釋の善良さを持つてはゐるものの、それを直ちにあらはすことが出来なかつた。

「馬に耳のあるくらゐの事は知つてゐるさ、けれども此の馬には耳もなければ、心こゝろてななものもねえ、この忙しいのに誰が水をつかはせる奴があるか、そんなおれの氣持に少しもあやからないのが癪なんだ、打ち殺したつて足りねえ。」

「馬だつて心しんくらゐ持つてゐるが、この馬はけふは没分漢むくぶんぢやんになつてゐるんだ、そこへ持つて來ててめえが打擲するからなほいけななんだ、打つことはいけねえ、馬は打つてはいけねえ、鞭でなでてやればいいんだ、びしつと行つても、憎しんで行くのと、元氣をつけさせるために叩くのは、手がちがふ、受ける馬の方でもちがふ、スコップで叩く奴は世界ぢゆうでおめえ一人だらうよ。」

「スコップの背中はながらがらん洞で痛くはないんだ、スコップ、スコップと仰山らしくいふな、しまひに、スコップがどこへ飛び出すか分らないぜ。」

「味をいひやがる。おれの横面にスコップが飛んで來る前にてめえの首は左ッ側へ向いてゐるだらう。」

人夫はぶりぶりして河原道具をひよいと肩にかけると、歸り支度をした。つれの

男も道具をしまひかけた。

「先刻雇人だとか何とかいつたが、雇人は気が向かないと仕事中でも、お歸り遊ばすことを覚えとけよ。」

「歸るならかへるさ。」

「歸らないでどうするか。」

かれら二人は歩き出した。

「あばよ、馬は引叩かないでまぐさをやつてそつとしとけ、そして二時間も経つたら騙してつかふんだ。」

「おほきにお世話だ、馬の講釋は止めにしてくれ。」

後で馬子は土手に腰をおろして凝として、何もする気がなかつた。馬を叱ることも、引つ叩くことも、もう呶鳴つてわめくこともいやであつた。かれはスコップを片付け、そして人夫が最後にいつたまぐさをやり、二時間も休ませばいいといふ言葉の頭にうかべた。あんなに毒づいてゐながらも、やはり馬のためになるやうなこ

とを言つて去つたのを、これは馬ばかりの味方ではなく、やはりおれに對する友情のやうなものの現はれであつたらう。そしたら奴は明朝ちよつと誘つてみれば、例に據つて毒づいてゐても手傳ひだけはしてくれるだらう、ああいふところであんな細かい心づかひを見せることは容易に出来るものではない、あんな人間をつかはないことは、こちらの手落ちのやうなものになるだらう、明日はいつて呼んでやらうと、彼は穩やかな平常にかへつて行く自分を感じた。そして彼は馬のそばにしたしげに寄つて行つた。

「おめえの強情にはおれはほとほと手古摺つた。おれの毆る前に歩いてくれたらおれはどんなに喜ぶかお前がそれを知つてくれたら、何も彼もよくなつたのだ。」

彼は川原に下りて浸した手拭をさげて上つた、そして馬の尻のところの傷口に、ぬれた手拭をあててやつた。傷口を中心にしたあたりは熱をふくんで、いきつて異臭さへあつた。おれの氣持がどうして馬に分らないのか、おれが馬子の新米だから莫迦にするのか、おれは馬を粗末にした覚えはない、おれは大事にしすぎるくらゐ



だつたのだ、あるひは、けふは馬のからだが悪いのかも知れないと、彼は馬の眼を眺めた。充血した悲しいまぶちには、なにやら熱もあるやうだつた。彼は彼のしたことが急に振り返られ、顔の持つて行く處のないさびしさに對ひあふやうな氣持で茫然と谷川の川原續きを見渡した。日邊が靜かな程、半狂亂のやうになつてゐた先刻の自分が、淺猿しい醜い、自分でも二度と見る氣がしないほど、大人氣ない氣がして來た。

## 白髮大夫

後ろの山から栗の大木が庭にかぶさり、栗の毛蟲が一面についたらしく、栗粒く  
らゐのふんが朝毎に箒目をくぐつた。これは夏が来て春蟬の聲がしなくなると、庭  
におこる毎年の行事であつた。夜は板屋根のうへをしぐれのそぼつやうに、こまか  
いふんが落ちて來た。氣をつけてゐないと、聽えぬほど微かな音だつた。三四日經  
つとふんはややあらく、米つぶくらゐになり、例のしぐれの音がやや聞耳に立つて  
來た。毛蟲といふものは夜もふんをするものらしい。夜もふんをすることになると、  
起きて眼をさましてゐるらしかつた。

このあひだ木の枝から下りた一匹の毛蟲が、どう考へなほしたのか、また、絲を  
くつて枝に上つて行くのを見たが、かれは、口の中にしまひ込むやうにして、前脚  
で絲を手繰つては、すこしづつ上りはじめた。上るにも、顔を右と左とにねち向け、

さらに前と後ろに曲げて拍子を取り、前脚をいそがしく働かせてゐたが、首をうごかす動作が、見てゐると苦しげであつた。やつと下りて何も上る必要がないのに、かれは後尾を彎曲させ、そのたびに口を開けて絲をくはへ込むやうにしてゐた。どんなに近づいて見ても、絲は前脚に絲捲きのやうに捲きこんでゐるのか、それとも、口中にくはへこむのか、よく見分けられなかつた。老眼鏡のいる私はむしろそれらを判然と見るために、眼をほそめ悲しげに何度も見すゑたが、たうとう分らなかつた。毛蟲の絲は一丈三四尺もある、高い枝から下つてゐた、そこまで上りつめるには日暮れまでかかる、六時すぎであつたし、三十分経つてゐても、かれは二尺くらいしか上れなかつた。遠いことである。その難事業は毛蟲の生涯に何度もないことであらうし、生れたからには、それを一度はやらなければならぬ試験のやうなものであつたらう、それも、地上におりるといふことは、命がけの仕事であり蟻や羽蟻といふ敵のほか、本能的に恐いものをも感じてゐるであらうから、全く生涯のうちで一度はしなければならぬ大きい恐怖であらう。ともかく、樂にかれは地上

に下りても、のぼるときは苦しいらしい。

庭にはまだ栗蟲は下りて來ない。栗蟲は絲を吐いては下りないものらしく、たまに落ちても、まだ成長してゐない小さい栗蟲だつた。しかしそれが四五日経つと、ふんは次第に大きく圓く紅豆あづきほどになり、れのしぐれのやうな音も大きくなり、いま、降り出したばかりの雨のやうになつた。夜はふんが屋根板のうへに落ちる音がはげしくなり、どれだけ栗の毛蟲がゐるか分らないくらゐだつた。寝てゐながらも落ちるであらうと、かぞへるやうにして耳を澄すとばらばらと落ち、屋根の上を轉がつて行くのが、山中の静かな夜に乾いた音を立てた。たいてい、一どきに二粒くらゐふんをするらしく、知らない人が聞いてゐても、それがふんだとは、ちよつと思へないくらゐであらう。

日は經つにつれふんは固く大きく、大豆くらゐになると、夜中にも神経に應へるくらゐ大きな音になり、しぐれのをとほ、つひにあられのやうに屋根をたばしつた。庭を掃くとふんは一かたまりで三合も四合も掃き寄せられ、雨水はふんの灰汁でに

ごりを帯びるやうになつた。消炭色をしてゐて汚くないふんは、土の窪み、あやめの根元などの筈の先のとどかぬ處に、くろぐろとたまり夏深い感じであつた。或日、落ちて來た毛蟲は、普通の栗蟲ではなく、もはや完全な白髮大夫の姿に變つてゐた。乳白色の胴體にほんの少しばかりの薄緑を溶かしたやうになり、蠶のやうなつやをふくみ、一面におなじ乳白色の毛をはやしてゐた。その毛は纖くやさしく又するどく立つてゐて、一見美しい植物的な圓光をもつてゐた。白髮大夫とは誰がつけた名前か知らないが、これは、この毛蟲の美しさに戯れてあだ名をつけたものらしかつた。最初は一日に一匹くらゐ落ちて來たが、次の日は二匹三匹になり又その次には一日五六匹と落ちてくるやうになつた。書齋の前だけではなく、屋後の勝手庭などにも、何匹も次から次へと落ち、それが夜など屋根のうへでは、ぱたりと屋根板を敲いては落ちて來た。かれらは成熟期にはいつたらしくその重たいからだを、風がふいに吹いたり少し暑い氣温に變つたりすると、板とか、葉の先とかにはじめはぶら下がるやうにし、機が熟して來ると柔らかにむしろふうわりと落下する

のであつた。でつぷりとふとつた白髮大夫は、地面のうへではぱたりと痛いやうな肉體的な音を立てて、落ちた。そしてほんの少しうごくが、間もなくじつとそのまま二分間くらゐは、うごかなかつた。柔らかいからだはそのために潰れるとか、傷つくとかいふことがなく、ふんも木の上で充分に済して下りて來るらしいのである。口を見ても、口から何も吐いてゐない、成熟期の落下には却つてその柔らかいからだつきが、その柔らかいために保護されて傷つかないやうになつてゐるらしいかつた。からだだがだぶつくやうに見えるが、あれが却つていいらしいのだ。白髮大夫はじつとしてゐるあひだは實にみちかい時間であるが、いはば假死の快い状態であるのか、まるで動かなくなつた、かれはやがて少し身を起すやうにし、同時に氣を取り戻したやうであつた。冷たい地表が身にしみ、目的地に著いた確かりした感じが、早くもかれの體内におこる異常な使命的状態を四邊に低徊させた。しかも、かれさへよく分らない前方にある誕生が、どういふ時間のうちに行はれるかについて、些かも豫期してゐないやうであつた。かれは足の向くままにのろのろと歩き出し、そ

れが人家の腰板であらうが、軒下や園の上、または格子戸の隅の方であらうが、一向おかまひなかつた。ただ、必要なものは少々のくらさと、些細なものかげと、そして誰にも見つからぬ氣懸のない個處でさへあればよかつた。かれはもぐもぐと、木の葉などはもう食べない、従つてふんはできるだけ木の上でしてゐたから一粒も出なかつた。食慾などはくすりにしたくもなかつた。かれはただ使命にかがやいてゐた、そのでつぶりしたからだには、一枚や二枚の葉はたべなくとも、優に三日や四日間を支へることができるのである。かれが栗の木から落下したときに、すでにあらゆる生活の更變をもつて、あらはれてゐた。たのしいふさふさした栗の柔かい葉の旨みは、その幼ない日とともに山のあなたに吹つ飛ばされてゐた。かれはもはやそれらのあさはかな回顧を持たない、いま持つものはかれが生れかはる不思議な蘭の世界に、これからかれ自身がはたらいてそれを作り上げることによつて、しばらく生きることでだけであつた。それは一日か一日半くらるかかれば出来上る。そして足の向くところが氣に入ればじつと立ち停まり、そこに納得さへできればかれは

蘭をつくらなければならぬ。

或る白髪大夫はもみぢの葉の上に、落ちた。また、或るものは熱いトタン屋根の上に、一大音響とともに落ち、あえなくなつた。また或る白髪大夫は庭石のうへに打ちつけ、さすがに、ふたたび歩き出すことがなかつた。胴體の節々はくらしい輪になつてりんくわくをあらはし、肉たいは乳白色にきつと土のやうな襷せたいろが、一種のごつた氣はひをあらはし、ただちに全面を蔽うた。しかも、あれらの美しい針毛はたちまちに薙ぎ倒れ、悲しい禿げ頭のやうなつるつる坊主になつて了つた。永い夏の日を越えてきた木の上の生活をうまくこなして來ながら、最後に地上に行き著く日にしくじつたのであつた。それでも、かれは二三度からだを反復しながら、日没にはすでにうごかなかつた。かれの抱いた悲しみなどは全世界にとつては物の數ではない。ただ、かれの臨終を見た者だけが、ものの終りのゆるがせにすべからざるを知つたのみであつた。私は白髪大夫のからだをつまんでそれを棄てようとしたとき、すでに、からだの張りが喪はれてゐることを知り、かれのゆめの終つたこ

とを知つた。一體、ゆめは人間ばかりにあるものではなく、昆虫などといふものは、全生涯がゆめで綴られてゐるものではないか、ゆめばかり見て、そのみによつて生きるために命が短かくともいいのではないか、鳥や蝶や蟲などは好きに飛び歩けるやうに、ゆめばかりがその心に榮えてゐるのではないか。かれが伸び縮みしてゆくことに、伸びたときに乳白のみどりはうすくなり、縮んだときにそのみどりが濃くなる。それは、ゆめであるよりも美しかつた。

私は二匹の白髪大夫を真正面から這はせ、かれらがそこで喧嘩を挑むであらうと想像した。それにも拘らず二匹の白髪大夫は、行きあふと、ちよつと顔を合せて見ただけで、右するものは右し、左するものは左行して、おとなしく別れた。すこしも挑みあふことがなかつた。しかし彼らに一本の棒を眼の前に見せ、その肢體にふれると、口でくひ付き、尾のさきにある針で刺して、たたかひを挑んだ。そして最後にはかなはないと見ると、かたつむりのやうに圓くなつて頭をつつみ、じつと死んだ真似をして見せた。相當永い時間をかけて敵を欺く行爲をつづけ、もはや大丈夫

だと見ると、ふたたび歩行を續けた。蟻は彼の胴體を食ひやぶる齒を持つてゐるが、庭ぢゆうの何十とも數へきれない白髪大夫で、蟻やその他の敵によつて殺されてゐたものは一匹もゐなかつた。かれらの幸福な旅さきには、敵があらはれてゐなかつたからだ。この山中の極寒地にゐる蟻は動作も鈍く、からだに濕氣があつて精悍を缺くところがあつた。なかには歩くといふよりも、うごめいてゐる感じの蟻さへゐた。乾燥地帯にゐる蟻のやうな鋭い肢體は持つてゐなかつた。

白髪大夫の或るふとつた一匹は、玄關の格子戸の棧の間に辿り著いた。その棧の上の方に去年と一昨年のかれらの繭の殻が、二個、間を置いてならんでゐた。掃除する人も、またそれをさせる人も、毎年それを見たままで取り除くのも物憂かつたので、そのままにして置いたのである。そして今年の白髪大夫の選ばれた一匹がはるばる、第三の列に加はつたのであつた。かれは辿りつくと同時にじつとして動かない、かれはかれの繭をつくるために好箇な場所をえらび得たことを、すでに感知してゐたのであらう。午後すぎから口から細い絲を吐き、それを格子から格子にか

け渡すために、首をうごかし倦むことがなかつた。絲は、規律のない亂れをみせて架けられてゐて、蜘蛛などのやうなきちんとしたものではなく、いかにも山の白髪大夫らしい動作であつた。その作業のはじまつたときには、乳白色のつやは失せ、針毛は剝脱されてつるつるになり、いくらかの憔悴を見せてゐた。日没までにかれのゐるだけの場所は悉く絲で倦かれ、外部からも、内部からも出られないしがらみが作られた。そして日没後に燭の火で見ると、かれのからだには茶褐色が刷かれ、わづかな間に驚くほど瘠せおとろへてゐた。よく見ると、それは瘠せてゐるのではなく、からだが緊つて行つたと見る方が適當だつた。内部にも一面の絲がつむがれ、かれの肢體にも、絲が何時の間にか捲かれてゐることを知つた。かれの安心したやうな悠然たる姿は、夜の間はどう變るかは知り難かつた。ただ白髪大夫としての生涯があたらしい更變の途にあること、ふたたび姿を變へて生きることすら學び得、また自らそれを會得したものの馬鹿にならない事がただけが私の頭をとらへた。二度姿をかへて生きるといふことの複雑さは、どこまでが先の世の歴史であるか、ど

どこまでが後の世の記號であるかが、かれ自身區別するにあまりに小説的な迂曲の難解さがあるであらう。あるひは白髪大夫はそんなめんどうなことは考へないであるかも知れぬ。だが、事實は曲げることも消すことも出来ないものである。かれは第二番目の命をまもり、その命の發揮するかぎりの生活が、山と野のあなたにあつた。ふたたびみどりの葉はなびいて花をあらはすところの前方に、かれは例によつて不思議極まるゆめを生活する自信を持つのであつた。私は白髪大夫の生涯をゆめになぞらへて見たが、かれはゆめを生かして行くから大したはれがましきであつた。夜がこともなく明けた、だが不思議な白髪大夫は、一夜のうちに蟬のからに見るやうな硬質の蛹の著る皮のやうなものを見つけ、一面につやを持った節々を黒い縞にあらはし、足も頭もそれらで蔽ひつくしてゐた。もつと驚くべきことは粗雑だと思つた。たかれの網のふくろは、精密な南京袋のやうな強さでむしろ手固くつむがれてゐた。格子と格子の間にかけては、その袋が風雨にぬれても剝落しないための、最大最緻な注意によつて架け渡されたものであつて、却つて縦横に亂れた架け方をした方

が、強くねばりがあるのであつた。その絲はきらきらときらめく絹絲の一種であり、細きは蜘蛛の絲とおなじくらの細さであつた。變貌變身したかれは、その袋の中は自分とおなじたけにつむがれてゐて、頭を先きにして殆ど動かずに永い春を待ちまうけてゐるのである。この土地には恐ろしい驚くべき凍結期間があつた。氷點下二十度の冬を袋の中でそのままでおくるとしたら、それは偉大なる命のまもり手だつた。また命の強いねばりであると思はれた。若し蛹の内臓的なものがあるとしたら、それは氷ることが請合である。氷らずにゐるといふことは有り得ない。しかしそれは氷つてすこしも差支へがないやうに出来てゐるのではないか。さまざまの蟲の卵が氷つても何でもないやうに、そして夏が來れば出てすだくと同じに白髪大夫も、すこしも氷結にはまゐらないのではないか。

さらに驚くべきことが發生された。その日、すなはち白髪大夫が袋にはいつた午後のことだつた。私達小さい家庭の者どもは、植木屋を加へて、庭のひと隅でお茶を喫むためにつくられた縁臺の上に集まつてゐた。二度冬越しをした私どもは、こ

の冬で三度の冬越しをする覺悟と用意とで、お喋りを續けた。雪がすくないこと、好晴の日の續くこと、あらゆることが炬燵をかこんで行はれることの、比較的面白い冬であること、寒氣とたたかふことの清潔なことなどを話してゐた。さういふ話の間ちゆう、誰の耳にも、紛ふ方もない鼠が物を齧じるやうな物音が、間を置いて聞えた。しかも透明な夏の景物を見ながらゐる皆は、敢て憂鬱な鼠のことを話したくなかつた。けれども餘りに烈しいので植木屋がいつた。「鼠が出てゐるらしいですわ、先刻からすつと何か齧じつてゐる。」そして皆は玄關の方に期せずして振り返つた、玄關のうへの天井うららしく、かりかりといふ音は少しも絶えなかつた。私も玄關の方に向いた、やはり天井裏らしい。

玄關の上部をしらべて見たが、近づいても鼠は恐れる氣はひもない、やはり、かりかりやつてゐる。ふと例の白髪大夫に氣がついて見ると、驚くことには鼠と思つたのは、白髪大夫であることが判つた。白髪大夫は自分の袋の中でころがつては起き上り、そしてまた轉がつては遊んでゐた。そのたびに乾いた袋はからからと鳴つ



てゐるのだつた。袋の中は一種の空洞だつたから音がしたのである。何故白髪大夫がそんなに踊らなければならぬかといふことは、つにひ分らなかつた。一種の袋の中をかためるための運動であつたか、それとも袋が出来上つた嬉しさがつつみ切れなくて、轉がつたり起き上つたりしてゐるのか。或はこの種の蛹は、習慣的に無意味にころがつてゐるものだから、よく分らなかつた。私はやはり白髪大夫が袋の出来上つた嬉しさを、さうやつて踊つて表現してゐるものと思へなかつた。實際、それは嬉々としてころがつてゐたからである。間もなく人びとの氣づかないあひだに、白髪大夫は音を絶つて踊らなくなつた。かれは落著いて頭を上部にしたまま涅槃の状態で、しづかに先刻からの喧騒とは、別の世界に茶褐色の不動の姿を整へてゐた。その姿整はなにか頼母しく眞面目であり、犯すべからざるもののごとくさへあつた。

白髪大夫は落下のさい、もみぢの木の上にとどると、しばらく鴿のやうに葉をうごかしてゐて、小鳥とまがふ感じがあつた。かれはもみぢの葉を五六枚ばかり例

の口から吐いた絲でかがり、それで自分のからだが入るだけの穴を開けて置き、最後に外部の絲かがりが濟むと中側からも葉と葉とをつづり、雨をふせぐため一枚の葉を上部に傘のやうに被せて置いて、さてまた自分のはいるだけの袋を内部に置いて作るのである。これらの仕事は格子戸につくられたものと同じ型であり、中にはていねいなものもあれば粗暴なものもあるが、悉く同型で同じい努力がつひやされてゐた。葉が落ちても、葉柄にからみついた絲は、さらに小枝に渡してあつたから、落葉すれば枯葉となつても、木枯にも疾風にも吹きちらされないうぶらんぶらんしながらも付いてゐた。淺間おろしの皓々たるなかでも、白髪大夫の袋が枝からちぎれて吹き飛ばされることはなかつた。冬の好晴の日、これを枝の上に見るとは、遠い夏の日の思ひをいや増して哀れむの情が深いものであつた。諸君は秋とか冬とかに、これらの枝についたぶらんぶらんとした巢の繭を見付けることがあるでせう。そしてその見付けたときにちよつとした氣がかりのやうなものを感ずるであらう。間もなく忘れてしまふことがあるでせう。あの氣がかりのちよつとしたも

のこそかれらが私どもに注意を呼びおこし、なにか話しかけたのだと、そんなふう  
に考へることも無駄ではない。さういふふうに物を考へることは一種の神祕だと解  
されて来たが、實際、人はかれらといつも話をつづけてゐることに據つても、生き  
てゐる或る時間があるものである。

## 世 界

あれが鶉だね、鶉も黒つぐみといふ奴で、くうろと何時も元氣好く啼く、回につかふのもあの黒鶉でときかが立つて眼が鋭く、黒い翼をしてゐるので立派です、はあ、けらもあるな、と、をぢの宮さんは裏の林の木の間を覗きこんだ、青げらだね、ほう、しなへも、もう渡つて來てゐるんですね、シベリアからすつとやつて來る青くびのしなへだ、しなへのことを信州では赤腹といふんだと、灰三はいつた。秋になるときふにゐなくなるが、しなへが木の上で啼くところにも春になるんだが、赤腹がしなへといふのかと灰三ははじめて知つた。をぢはあれで深山しんざんにゐる鳥ですよ、深山にゐる鳥といふものはどこまでも小鳥らしい俗氣がなくて、さつぱりしてゐる、深山の人氣のない尾根おしや谿たにあひにゐる鳥は、わしら人間から見ると淋しい處ばかりえらんで渡つてゐるから、深山しんざん特有のほひがくツついてゐさうだね、あれらの眼

付に深山のさびしさが現はれて居れば居るやうです、鋭くてどんな細かい蟲でも飛びながら見つけてゐるんだからね、しなへなんかの眼の利くことや美しいことは、あれは美人の腫なんかより遙かに澄んだものだ、ことに鳥の瞬きといふものは全く美しいね、ぐるつと臉の上下をひと廻りして、そのたびに薬をさしたやうに洗はれてしまふんだからね、山鳩やしなへのお腹には、見たこともない木の實がはいつてゐるが、あれはたしかに深山の木や草の實を食べてゐる證據で、大抵は赤い色の實が多い、赤い實は大概食べられるらしい、それに鳥のお腹はどうかすると、薬くさい匂ひがするのは薬草を食べてゐるから、そんな匂ひがするんだ、昆蟲を食べてゐるあひまに薬草をまぜてゐるといふことにも、自然に心得ることはちやんと遣つてゐるんだね、そこを考へてやると、却々可哀らしくて、よく生きることを知つてゐると言つて褒めたいくらいだ——をちの宮さんは小鳥通でこんなふうの説明した。鳥刺が旨くて、すくみ笛といふ笛を口に唾へながら、すくみ笛を聞いて竦む小鳥を刺してゐた。すくみ笛といふのは鷹の啼きごゑを仕込んだものだった。をちは川漁

にもたけてゐて、鮎とか鱒とか鮠とかを網で打たなければ、やすといふ鮎で刺してつかまへた。硝子箱といふ硝子の底のついた覗き箱と、例の銛のやうなやすさへあれば迅い水中を走しるさかなの背中に、やすはその美しい肌を瞬時にしてとらへた。大きい鮠は鯰くらゐあつたが、がつちりと鮠のあたまに手應へがあると、大きい鮠はぐいとからだを引くちからで、鐵のやすはよくしらべるときつと直線にくるひが生じてゐる程だった。つまり何だか、一生に一度きりの怪力をあらはすんですね、なまなましい、すべつこい鮠のからだを確かりと手ににぎつてみると、こんな大きい鮠がよくゐたものだといふ感じに、やはり川とか水中とかいふものの祕密をさぐつたやうな、そんな不思議でない不思議をちよつと感ずるものです、越中の黒部で鱒をたくさん突いたときに、岩の上にそれをならべて算へてゐると、何か悪いことをしてゐるやうで氣味が悪かつた。谿谷の瘴氣といふのか、水中から上つた寒さだけだか、それとも、二つの谿からせり合つた木々が相觸れようとしてうすぐらさがさうさせるのか、そろそろ歸らうといふ獨り言がひ口に上るくらゐだ、さう言つて

みなければおさまらない變に對手をかんじてならない氣持であつた。水の中にはいつてゐる岩の穴をさぐつて歩いてゐても、何ともないが、上つて見ると水のすこみが深さと一緒にどつと胸に来る、いままで騒がしてゐた水の中がをさまつて来た静かさが、耳のへりに震動をあたへてくるほど森として来る、獵師とか漁夫とかいふものが歸途を急ぐのは、ただ、家に戻りたいからではなく、その處に永くゐられないものがあるからだ、永くゐることが出来ないのだ、おそろく咎められるやうなものがあるのだらう、黒部ではさういふ感じで一杯であつた。

「殺生といふやつも、親ゆづりのものらしいね。」

をぢの父の城太は、晩年はほとんど純然たる獵師といつて、よかつた。山がけが、おもて、霞網で鴨の渡る秋おそくまで山に籠つた。山といつても尾根づたひに渡つて来る鴨は、一どきにかかるときは四五百羽をかぞへた。山鳴りのやうな翼のひびきを立てた一群の鴨のわたりは、豁谷をうづめた幅廣い緋もやうをひるげ、伸縮自在のまま林の眞上をくろくそめあげ、さらに低くその羽根たまりをもとめるやうであつた。

あつた。そしてそれらが一どきに霞網にかかると、はづれた鴨は波紋のやうに舞ひあがり、遠くの尾根の空で群を整へてさらに渡つて行つた。だが、渡りが外れると幾日も幾日も、そして一ヶ月もづつと續いてかからないことがあつた。かからないとなると全くの空谷の網構へで、鴨の群はただ通りこえるばかりだつた。五十餘日をから戻りした父は網をかついて、一羽の鴨もとらずにかへつた。

「今年はたうとう鴨に食はれた。來年は食はれんぞ。」

父は絶望をしない。獵人は絶望することは禁物らしい、現にわしなぞも一疋もさかなはとれなくとも、父は手すぢに疑ひを持たなかつた、父は冬の夜長にめんだうな網かがりをしながら、飽きることがない、よく母がいつたものだ。

「鴨も毎年のことだから覚えてゐてあなたの網にはかかりませんよ。」

「おれのすく網はかすみもかすみ、本かすみだ。」

父は蜘蛛のいとこのやうなかすみ網をかかるときには、もう老眼鏡をかけてゐた。

何時までも網仕事をしてゐるので母がいやがつてゐたが、鳥網ばかりではなく、鮎

網もかがつてゐた。鮎季あきになると父は日がすつかり暮れてからでない、歸らなかつた。父のかへるまで夕飯を待つてゐてすぐ母は鮎を焼き、わしや妹達が鮎をたべてゐるのを楽しさうに眺めてゐた。

「上流ではまだ山吹が咲いてゐたよ。」

上流もよほど深くはいると、季節は遅れてゐて市街では初夏の光景でも、山では晩春の風物がとどまつてゐた。ふしぎにそんな山の奥でも、お晝にとれた鮎を石のかまどを作り、木の枝の串に挿して焼いてゐると、何處からやつて來たのか、けふも、一疋の猫が鮎のほひを躑ぎつけて來たんだが、人なれがしてゐて山猫ではない、村落までは一里餘あるのにどうして遣つて來たんだらうと見てゐると、猫は鮎の骨を食べてしまふと、猫らしく卒氣なくうしろも向かずに歸つて行つた。しかも、細い徑がついてゐる山ざかひを、わきみちにも入らずに眞直ぐに歸つて行つたが、猫でも、山里にゐる奴は遠くまで出掛けるらしく、そして人の通る道路をしぜんに選つて歩いてゐるものらしいね、あんな上流で猫を見ると人間くさくて猫のゐる處

でないやうな氣がするな、父は鮎ときには殆ど隔日くらゐに上流に出掛けて行つた。

父の山ごもりは城下町から四里隔れた、鶴來といふ町からはいつた山だつた。山ごもりは小屋掛から炭や薪や鍋釜に米、酒醬油といふやうな生活にゐるものを選んで、そこで九月終から十一月のはじめまでこもつた。鶴は仲づかひといふ者がゐて、朝の鶴を町にはこんだ、その間ぢゆう入浴も顔剃りの間がないらしい、罔につかふ鶴の餌をつくり食事をつくつたりして、山中の短かい秋の日はすぐくれた。鶴來といふ町のすぐわきに手取川といふ奔流があつて大川だつた。町のすぐ屋根廂の上には白山の峯つづきが斷壁をそるへ、町は斷壁に抱かれ、大川に裾をくはへられてゐた。そこに三四十軒の遊廓がひとすぢ屯してゐて、夕方には赤い燈を山の裾にならべてゐたが、そこらの山村は美人系といはれてゐたから、柔和で小がらな色の白い女が多かつた。灰三も何度もその町に幼少な折に遠足に出掛けたものであるが、遊廓といふものをこの鶴來の町で見たほど、小ぢんまりした家族でない家族らしいものとして見すごしたことがなかつた。おそらくをぢの父も、山中でどうにもならない一

人暮しの夕方には、坦道をひらつて下り、そしてまた暗い坦道を小屋がけに戻つて行つたものかも知れぬ。町はこの往來で絶え、道は白山の麓まで大川の巖壁をつたつて續いてゐたが、點々として小さい村々が山の間を散らばつてゐるだけで、道路は白山の登山口でさびしく途絶えてゐた。さういふ往還道であるから遊廓はつひちかごろまであつた。灰三はよくねむられぬ晩など鶴來の町を頭にうかべ、ねむるためによすがとしたこともあつたが、何時も山の暗さに搦だきすくめられる町も、町の女らにも、叫び聲もあげぬ素直さが感じられたのである。

山小屋といつても、ほんの一人きりだつたから父も餘程殺生が好きだつたのかも知れない、三日目ごとに母からおくる食糧も、その日のうちに著かないこともあるらしいが、さういふ時は町に下りるか、山にある食物をあさらないかぎり食糧はなかつたらしい、網は前の日に張つて置いて夜が明けるとちよつと前に鶴が渡るので、四時前には起きてゐなければならなかつた。そこで五十日も暮してゐるのだから、父も餘程好きで鳥構へをしたものであらう。

血すぢといふものも、單に血統だけではなく、それを毎時も見えてゐることが血すぢと一緒にほたらくのだ、父がね、冬にはいると何時も網をすいてゐる、根氣好くこまかい糸を手操つてはすくの見つけてゐると、しぜんに覺えて來る、罟の鶴籠にしても、永い間籠で飼ひならして竿に段々のやうにして吊してあるんだが、それを下ろすときにつひ手傳つたり、餌摺りや餌の青みの朝しらげといふ柔らかい草を摘むことも、いつのまにか覺えて了つた。さういふ生ひ立ちがわしをして小鳥や魚をとることを覺えさせることも、しぜんなことであつたらう、父はわしを川に連れて行くと淺の掴み方とか、鮎の追ひ込みとか、籠の突き方をしへてくれた。面白いから覺えるやうになるのだ。

をぢはまた言つた。薪といふものがなくなつたので、僕は川の上流に出掛けて行つて薪拾ひをした。灰三さん達の女中さんが裏山でぼやを拾ふのと一緒だ、山の上流の砂床や川原には、木の枝の折れたのが出水でながされて、かかつてゐた。かなり大きい枝でも折れて短くなり、圓みのへりが巖や石に打つかつて剝がれ、まん

まるい棒になつてゐる。皮も小枝の折れ口も擦り減つてゐるから、どれほど奥山から流れて来たものか分らない、また奥山からながれ出してからも彼方の川床や、此方の巖の上に押し上げられ恐らく永い間そこでじつとしてゐたものであらう、それが出水で流され、また次ぎの砂床に引つ懸つてそこでも永い間そのまま滞つてゐるのだ、それがまた水に流されたのだからその間に風雨にさらされて、圓々した棒になり瘤のやうになり、或るものは石ころのやうになつてゐた。それが不思議にどの流水を見ても、水のすぢのやうなものが木肌に彫られてゐるのだ、河原の石といふものをご覧なさい、どの石も下流の方に向いて頭を突き込んでゐるんです、そして石の表面には奔流のすぢめがついてゐて、流れの迅さがとどまつてゐたことを印象してゐた。一つの小さな石面の穴を見てゐても、それが左右どちらかに穴の口がながれたまま開いてゐる、流れが悠々してゐるやうで決して悠々としてゐなくて、迅速に傷つけるものに傷を負はしめてゐるのだ。氷河が巖石にすれきづのあとを遺してゐるやうに、川にある石の悉くが風雪のあととはとどめてゐなくとも、奔流の氣みち

かな勢ひと怒號とを石面にゆめのやうに刻み込んでゐます、だから拾つて来た薪はすくなくとも前の年の冬に折られた木々の枝らしいのです、あるひはもつと古くから山の池などになだれに折り込まれ、そのまま、木の形をして池につかつてゐて三年も四年も経つて、出水でやつと流れ出した枝もあるのだ、山でぼやを拾ひ、川で流水を拾ふといふのも、却々、うがつた話ですね、なかには柳とか櫟とかの軟らかい流水などは、ささらのやうに細かく裂かれてゐるものもあるね、とても、人の手ではああまで筋ばかりに砕いてしまふことは出来ないが、水といふものの激しい勢ひは全く時間が経つたら、考へも及ばない壓力をあらはして来るものらしいな。をぢは、戦争中は鮎や鯉をとつてゐたが、それを毎日焼く臭ひが近所にもれて困つたね、しまひに鮎漁からもどると賣つてくれと頼まれるやうになり、一層困つた。だからなるべく日が暮れてから歸るやうにしてゐたものの、焼鮎の臭ひがしてはかくしても隠し切れなかつた。鮎といふさかなは臭ひが烈しく、途中、猫にゆきあふと、どういふ猫でも鳴きながら後について来る、追つてもしつこく尾いて来るのは、好物の



臭ひに引き擦られた腹が、どうしても止めることが出来ないからであらう。

灰三はをちの宮さんに戯談とも、真面目ともつかない話振りで何となく後事を托むことがあつた。それは親戚といふものが、一軒もなく、俗事を整理するに才を持つてゐる人物が手近にゐなかつたから、妻の兄でもあり事務的なこともめんだうがらないで遣つてくれるをちが一等適當な人のやうに思はれた。それは娘の三子と、息子の朝吉にそれぞれ分ける品物のことについて、信州ではまだ雪のふる二月の或晩、茶話ついでに彼は面白さうにはなし出した。娘の三子は日本のしきたりからいつて、結婚してしまふと何も分けて貰へないのがつねで、それが普通のことのやうに習慣になつてゐた。大ていの家は長男がみんな相続するやうになつてゐたが、灰三は新憲法發布以前からも、さういふ家族制度に長男ばかりを重んじることは革めねばならないと考へてゐた。同等といつても、家付の物は建物のやうなものであるから、それを二つに割つたり裂いたりする決にゆかないが、三つある物はその一つ

は願け合はなければならぬ、そして他の別の物でその不足の分も補はなければならぬのである。正常なおなじ父親の血すちをうけた者は、女であるから何も貰へないといふことは、日本の古い因襲であるがそれは廢めなければならぬ、たとへば家といふものも女は相続できないことになつてゐるが、なるほど、一軒ある家を二つに分割することは出来ないから、他に適當な方法でその代りになるやうな物と與ふるべきものであらう、そして代々の家をまもる者は長男であるから、家はやはり彼がそれをまもり繼ぐべきであらう筈だが、そこを無表情に切り放つたむかしの制度はあらためなければならぬ、だから、灰三はをちを證人のやうにして此人の耳にも入れて置くことは置きたいといふ考へから、彼は三子にいつた。

「君にけふは一つ贈り物をしよう。」

「ほう、めづらしいわね、前觸れがあつたりして？」

「君に大森の家にある離れと、輕井澤の離れを二軒ともおれが死んだら遣らう、そして離れについてゐる附屬物も悉く君の所有にするがいい。」

「それは有難いわ、たしかにいただいて置くわ。」

「そして置けば君は何時でもそこに轉がり込むことが出来る決だ、どんな時に家を失ふことがあるかも知れないからね。」

「戴いて置けば氣勁いわ。」

三子は、かねてかういふ話のあつたのが立證されたので、嬉しさうだつた。

「そのかはり掃除とか手入れとかは怠らすにしなければいけないよ。」

「ええ。」

「なあに些つとも關はないで汚すだらう。」

朝吉は横合からくさした。

信州にある二軒の離れはそれぞれに後架も次の間もあるので、煮焚きも出来るし、夏でも冬でも住めるやうになつてゐた。大森の家の離れにも後架と次の間があつて、どういふ時に家といふものに心要を生じる時があるかも知れないので、灰三は姉弟喧嘩もないやうに朝吉の眼の前でいふのであつた。たとへば其他、机は五六脚

もあるからそれも分ける、火鉢とか箱類とか棚とか佛像とか陶器とか、そのほかの什器とかもそれぞれに分けあふべし、零細なものはあるが火鉢には火箸を添へなければならぬし、壺類にも箱があればそれも入れてから分けなければならぬ、鐵瓶とかさんとか木の盆とか額とか掛物とかも、それぞれ何個とか數本とかは頒け合はなければならぬ、數多い絨氈はそのうち二枚以上は三子のつかひ料として進んでやらなければ、姉弟のよしみに反するわけだ。いかなる細かい取るに足りない物でも、必要とあつて三子が申し出たらこころ好く分けるが宜い、日本の昔からの制度は一度家を出ると何も與へないし、それを要求したり携ち出したりすると盗人扱ひにしたものであつた。それは昔から灰三は反對であつた、そしてその反對を灰三は實行する時期に辿りついてゐるやうなものだつた。

灰三はいつた。

「僕のそだつたお寺は僕が繼ぐ筈だつたがね、坊さんは厭だといつたものだから母が父の死後、讓渡といふ形式で賣つたらしいんだ、その時分の金で五百圓だつた

らしいが三十何年か前の話なんだ、ところが兄が法律家なものだから形だけでも、願けようといふことになつて五十圓送つて来た、その頃の五十圓も大金だが五百圓の一割だから悲しい一割だよ。」

「あのお寺が五百圓なら廉いものだね。」

をぢは、古刹がそんな簡単に片づいてゐるとは、知らなかつた。母だけが知つてゐて、他の誰も知つてゐない。

「つまり繼母が金にいいいだんだね、僕はお金を取つてあつたかどうかも知らなかつたが、送つて来たので知つたのだ、僕はもつと貰へたかも知れなかつたさ、そんなこともあるから、姉弟にうまく分けたいと考へてゐるんだ。」

灰三はその當時でも、何の憤慨すらも起らなかつた。かういふ事實が自分の身邊に再び起るやうなことがあれば、それは避けなければならぬことであつた。

「お寺を譲るといふことは什器もみな同時に譲るといふことになるのかね。」  
をぢは、あの寺には古い物があつたらうにいつた。

灰三は三子と朝吉に對つてあらためていつた。

「一例だがね、三子が家を出てから不意に庭の木がいるとか、花の咲く下草がいるとか、石燈籠が一本いるとかいふ時にも、それはあつさりと分けなければいけない、どういふ時に自家の物があるかも分らないから三子はそれを取りに来てもいいし、朝吉はそれを喜んで分けるやうにするんだ、父のものはその子である一人の物ではなく、つねに二人の物なんだ。」

朝吉はほんやりとして答へたが、いくらか氣持の平和を缺くといふふうであつた。  
「分けますよ。」

「親父がゐなくて子供が餓鬼のやうに譯つて遺品を分けてゐる例がよくあるからね、それは醜い以上に人間臭の満々たるものだ、竹一本でも二つに折つて二人の物にすれば間違ひはない、どんな仲の善い姉弟でも、親父が死んだ瞬間にすぐ頭にくるものは、平常ほしいと考へてゐた親父の品物なんだ、それにたかるのも當然だが、成佛したあらゆる親父こそ、いい面の皮さ。」

灰三は能辯になつてをちの顔をちよつと見てから、いつた。

「一體おれの家には親類といふ煩き者はないから、さういふ者共が現はれることはないのだ。をち貴の家くらゐであとには誰れもあるない。」

朝吉はこれは念を押して置かなければならないといふふうに、かねがね、ほしくてならない物をいひ出した。それは、まだ彼が年若で慾といふものも、成長してゐない證據だつた。

「青い毛布がありますね。あれは僕がほしいんだが。」

「あんな物を何にするのかね。」

「オーブアにします。あれは遣れないな。」

朝吉らしいことをいひ出したので、みんなは笑つた。

「あれは朝吉に遣りますよ。」

と、三子はそんな物は問題にはしなかつた。英國製のもう三十年も前に灰三が或る處から取つた原稿料で買ったものだつた。

「も一枚、茶ほい格子縞の柔らかい毛布があるな、あれもいるんだ。」

朝吉はかねて睨んでゐる、もう一枚の毛布のことをいつた。

「あれはわたくしいるんだが、一枚づつ分ければいいぢやないの。」

「うん、だがね。」

かれらは、両方で毛布をほしがつてゐるのは、孰方も、服か外套に仕立直す心算らしかつた。灰三はさらに言葉をあらためて好い氣になつていつた。

「それからおれの印税といふ奴だがね、だいたいに於て朝吉の所有になるものだらうが、ここに問題があるんだ、つまり本の内容に三子のことを書いた部分の印税の割り前は、三子が取れるやうにして置かうぢやないか、自分のことを書かれてゐるから取れるんだ、分るかね、それらは頁割りできちんと分けるんだ、そんなことも却々面白い話のたねになるぢやないか。」

三子は笑つていつた。

「本が出たらよく見て置かなければならないわね。」

「本が出るかどうかは分らんが、一冊や二冊は出版されるだらうからね、お茶菓子代くらゐにはなるよ。」灰三は益々好い氣になつてまた一案を考へ出した。彼は好い氣になると方圖のない男であつた。「それから一つ詩集が出版されるやうなことがあるとして、その詩集に限つた印税の半額を三子に分けて遣るやうにしようぢやないか。」

「詩集はそんなに出ることはたまにしかないでせう。」

朝吉は詩集なぞどうでも、いいふうであつた。

「だからその印税を分けるんだ、詩集はおれの著作のなかでは馬鹿にならない永い命を持つてゐるからね、外の書きものが出なくとも、詩集は世をあらためてまた出版されるものだよ。」

「さうかな。」

「おれの少年時分からの雀おどりがあの中にあるんだ、それを君たちが分けるのは、いいぢやないか。」

朝吉は肯づいて見せた。

「ほう！ えらい事になつて終つたぞ、それですつかりぢやないか。」

「あるだけ喋つて置けばあとで愚圖々々が起らない、まだ外に何かないかなあ。」好い氣になつた彼は、その好い氣をすつと打ち通してゐたかつた。誰も印税のことまでかれこれいふ文學者はゐないだらうが、それを言つて置くことは死後といふ文字をひと通り見とほさないから、人はいやがり怖がつていはないのであつた。かれらをそこまで導いて置くこと、特に詩集に限つたことにも、灰三の子供ばい好みと、例の好い氣なものが雜つてゐた。内々、詩集の印税を女の子の収入にきめたことに、好い氣な奴さんはこれに美しきがあるだらうといふ自慢さへ、ふくまれてゐたのである。

「明日になつてけろりとするんぢやないかな。」

父の性質を知る朝吉は、そんな問答を敢てこころみた。

「けふのおしやべりは悉く本物だよ、けろりとはしない。」

「その他の分は？」

「そりや家のために君がまもることになるのだ、何に費つてもいいが人に嗤はれることだけは慎しむがいいな、一體に君も三子も消費家だからそのつもりで慎んでやれ。」

「まるで遺言みたいね。」

三子は笑つた。

「それでも宜いちやないか、堂々としていいちやないか、醜い事が起るのは匿すことから何事も問題が起るのだ、君達は金も自分で出し入れしてゐるくらゐだから、それはもうちやんと分つてゐる筈だ。そんなことで迷誤々々してはいけない、金はいくらあつたら四分の一くらゐは三子に分けてもいいだらう。」

かれらは、そこでは黙り込んだ。灰三はその指定をきめると、これで何もいふことがなかつた。こんなことは凡ゆる父といふ人間がてきばきと決めて置かないから、あとで亂れと混雜がくるのであつた。あらゆる父親といふものは只ぬけぬけと死ん

でゆくことは許されない、墓場から引き摺り出しても、することはさせなければならぬ、父として立派に生きて来たことを彼等の前に示さなくともいいが、彼らが若ければこれを餓ゑさせることだけは、避けなければならぬ、すぐ人に迷惑をかけるやうなことを眼の前で寸断して置かなければならぬのだ、灰三はいつもこんなふう考へてゐたのも、凡庸極まる世の俗父の願ひがこめられてゐたのである。

「わたくしは一體どうしたらいいのでせう？」

と、先刻から黙つて聽いてゐた病妻が、一向自分がその仲間にはいつてゐないのを訝りながらいつた。灰三は氣が付いてこれはわすれてゐたといつた。

「きみは總監督だが、やはり君の存在するかぎり金なんぞは處理してもらふことは當然だ。」

妻は、實際の經濟生活では、金のことなどには灰三とか娘とかに委してゐて、關係してゐなかつた。

「それならいいんですけれど、一向、わたくしに何も仰有らないものだから。」

「憲法も同等な権利があるのだから、いままでの日本とはちがふからいいさ、いま、やつと氣が付くといふのも遅いんだがね。」

灰三など以前から考へてゐたことが、いま實施されるのも遅い感じであつた。

「ごたごたは起るまい、起つたら、このをちに相談したらいいだらう、君、相談對手になつて遣つて下さい。」

「分つた。」

をぢは、言葉短かく引き受けた。

「しかし書物のことは作家では誰に頼むの、それも聞いて置いて置かないとその時には困りますね。」

「あの人でもこの人でもいい、あの人はいはなくとも心得てゐるだらうし、君達にも判つてゐるだらう。」

灰三は、二三の懇しい友達の名前をあげた。それらは姉弟にも、かんでちやんと分つてゐる人達だつた。

「あの人ならいいでせう。」

「さういふ時はどういふふうに謝禮をするんです。」

「細かいことをいふ男だな、その時々を経済面からと、金の價値や書物の事からきめた方がいいよ、肝腎なことだがそのときにちやんと分つて來る問題だ、生きてゐる親父が死んでからの謝禮をきめることも、變ぢやないか、それを敢て質問する息子も息子だ、第一先刻からうかうかと本が出ることに決めて話をしてゐたが、あゝるひは後世つたなく出ないかも分らん。」

「さうだ、出ないかも分らん。」

朝吉は口眞似をして戲談めいていつたが、灰三も、たちまち後世托みなきことを知つて鬱然として嗤つた。

「本なんか出ないと思つてゐた方が薩張りしていいんだよ、遺族といふ奴は困るにきまつてゐるが、だが、本統のことをいへばおれはきみ達を窮らしたくないね。」

青年時代を不幸な貧窮の間に暮した灰三は、かれらに再び自分が経験したやうな

ものを避けて遣りたかつた。それは冗らない娑婆氣かも知れぬが、避けられるものなら、かれらをその外側に居させたかつた。灰三は朝吉にたいする人物的な慾望はまるで持つてゐない、彼がどういふ人間にならうが灰三はまるで干渉はしなかつた。文學者の息子だから、何か一方に抜け出た人間になるといふことなど、ゆめにも考へたことがなかつた。朝吉が原稿のやうなものを書いてゐても、それを止めもしなければ勵ますこともせず、また、見てやる氣なぞもなかつた。ただ、正しい鋭利な批評を彼自身の身邊に加へることを注意してゐるくらゐに過ぎない、批評は識見の卓抜から生れるものであるから、灰三はそれが出来るだけ素直なものであつてほしかつた。正しさと素直以外には、子弟をみちびく必要がなかつた。まがつた事、すねる事、いちわるな事、故なく疑ふ事は灰三といへども、朝吉に注意して置かなければならなかつた。批評の正確なことだけで人間が生きられるならば、それほど立派なことはない、親父が、一文學者として虚名があつても、息子はそれになぞらふ必要もなければ、度外れに勉強することはいらぬ、親父は親父としての生涯があ

つても、息子はそれに妙に勵んだりえらくならうと考へることは、自ら別問題であつた。えらくなつて親父の名を重からしめようと考へることは、俗物どもの考へることだ、息子は平凡に享けた命をまもつて居ればいい、それほど美しいことはない、親父の有名といふものは偶然であつて、それを足りない智慧で失ふまいとしただけであつて、そんなものに、息子があやからうとしたり摸倣したりするのは、親子もろとも俗物になるやうなものだ、だから、灰三は息子に對つて君は一體なになるつもりだと訊いたこともなく、また、それらしい問答をしたりしたことはまるでなかつた。正直な妻子を愛する人間になれといふ、さういふ凡庸な言葉しか灰三の口を衝いて出ないのである。灰三自身も、あらゆる意味で平凡な一人間にすぎない、平凡といふことはどんなに偉い人間になつても、なくてはならない急所なのだ。

或る日或る客があつて話を交へた。

そして灰三は戦争中の食糧に就いて誰が自分達に一等宜くはたらいてくれたかといふ話になると、どうも娘や息子がゐなかつたら、どんなに參つてゐたかも知れな



い、彼らが山村の部落から食糧をはこんでくれなかつたら、灰三と妻は飢ゑてゐたであらう、しかも、三子も朝吉も、學校は廢めて病める母に仕へ、かたはら、灰三の仕事の出来るやうに食糧を集めることに寧日がなかつた。

「娘と息子がゐなかつたら、僕は買出に出掛けてゐたかも知れないが苦しんだらうね、それに仕事も出来なかつたらう。」

客は奇妙な、むしろ感傷的な顔つきをしていった。

「あなたのところでは皆さんがあなたに仕事をさせるためにも、學業を放擲したといへば云へますね。」

「それほどでもないが彼らがゐなかつたら、書いてゐる暇もなかつたでせうね。」

「それならあなたの文學の犠牲になつたとも云へる。」

「それは少々言ひ過ぎだが、いくらかその傾向があるね。」

實際はそんな犠牲的な言分はかさだかだが、灰三は此處でどうともいへなかつた。病母の犠牲になつて學業を娘は棄てなければならなかつたことは慥かであつた。そ

してそれはその通りに迅速に行はれたが、朝吉は朝吉で父親の手傳をしなければならなかつたことも實際であつた。庭掃きも重なる仕事なら校正も重なる仕事であり、書き直しや綴込みや使も重なる手傳ひであつた。さういふ點でも學校など好まぬならやめてもいいと云ふことに、なつたのだ、客のいふことは當つてゐるやうであり、當るにすればかさだか過ぎはせぬかと思はれる節もあつたが、灰三の頭につんと應へて來るものがあつた。つんと來るものはすなはち責任感のやうなものだつた。併し學校に行つてゐても、騒亂敗退の時に何の學問ををさめ得られたか分つたものではない、娘や息子も、學ぶべきものが學校にはすでになかつたことを、知つてゐた筈だつた。

「執方にしても日本人がよくなる部類の人はあの時分から、よくなつて來てゐるね、悪くなるのもあの時分から悪くなつて來てゐるのだ、ともかくも日本人は一度丸裸になつて出直してゐることも實際だ。」

「その丸裸になつたときさくさが最近の日本人の間で同士討のやうな、無理無體な

騒亂が至る處で平和を極き亂してゐるのだ、一つの指導を失ひかけた智慧のない人間といふものが、どれだけ摺り墮ちてゆくかといふ問題は毎日新聞が呆れて書き立ててゐるぢやないですか。」

「この丸裸は何時まで續くか分らないが、遣る方も次第に退治されるからこの儘で愈々大きく深まるといふことはないね。それが遣れないやうな嚴格峻烈な手も必要だが、人間がそんな悪事で永く生きて行かれないことが分つてくれば、自然にやむやうになる、一個の人間のやけくそは波をつくつて廣がるから、一個づつがやけくそから脱けなければならぬね。」

「紙と木の家にいまでも住んでゐる日本人に、何が出来るものですか。」

「同時にかういふ事もいへるね、紙と木の家に住んでゐて世界に稀ないい繪をかいた達人もゐるし、世界にない發句といふ短詩形を考へ出した人もゐる、陶器でも彫刻でも建築でも、それから和歌でも、何時も類のない藝術を生み出してゐる、かういふ國は日本だけであらう、戦争などはがらでない、もつと頭をこまかくはたら

かすために作られてゐる人種であらう、繪などは全くまねの出来ないものだ、君子國ではないが、藝術の國土といふことは出来る、僕はえらばれた人間だけで、この國を藝術の淨土にしたいね、昔の支那が世界にもない藝術國であつたやうに、この國の政府ももつと藝術をたいせつにする必要があるね、これは、日本の生きるための途であつて、これには摸倣がなかつたやうに、これからも摸倣の仕事はないであらう、戦争は機械のまねばかりしてゐて、まねが本物を越えることに氣づかなかつたのだ、頭が深く永くはたらかなかつたことの不幸はそんなところから生ずるのだ。」

灰三はこんな意味のことを述べ、客は間もなく去つた。そして灰三はこれらの思ひのなかに彼の不幸なともいへる姉弟のことに、今夜は頭をとられてゐた。自分達に戦争中に一等つくしてくれた人間は、やはり他人ではなかつたのだ、肉身のみが相すくひ合つて生きて來たのだ、これは灰三一家ばかりでなく、何處の家族でも、肉身が身をもつてすくひ合つてゐたのであらう。だから彼らにその褒美として渡すべき物は渡して置きたかつた。すくなくとも、さうすることに據つて灰三の徳が積

まれるやうな気がしたからである。

「今夜は妙な話になつたものだね、後で面倒がなくていい。」

「出もしない本の印税まで云々するのは益々妙な話だが、死んだ友人で十五年振り詩集の出る友人もあるんだから、わすれた頃におやぢの印税がはいれば、ちらとでも親父の顔も思ひ出したらうさ、ともかく、人間もここまで来ると茫漠としてゐるが、皆生きて行くといふことも却々旺んなことだ。」

灰三は生きてこれから生活する人間と、生活といふものを殆全部に互つて盡し終へた人間との比較は、その比較を絶したものはあるが、日月もなほ同じい輝きがあるだらうし、子を産んだり育てたりするのも、それを事新しく遣る人間には想像の外に、生きるすべもありわざもあるのであらう、何といふ飽くことなき人生であることか、人間の生きてゆくことは全く無限で、胸が廣びろとして来て少しも悵鬱なものになかつた。老ぼれはくたばつて了へばいいのである。一人がそれぞれの結論を書き終へてしまへばいいのだ。結論のなかつた人間は、一人もなかつたごとく。

をぢのことを少し話さう、

灰三が上京するのにも、をぢも一緒に上京してくれることになつた。健康なをぢは力仕事は勿論、小まめな仕事にも氣をつかひ、灰三をかばつてくれるやうにしてゐた。灰三の元氣さはそれは口先ばかりであつて、いざとなると、漬物石一つ箱一つ持つのにも、骨が折れたのである。それにをぢは少しもじつとしてゐないで、よく働いた。そのひまには痔が痛まないか、湯はもう沸くだらうからおはいりなさいといひ、をぢ自身は家のまはりを整頓して重い物は自分でうごかし、いかなる面倒な仕事にでもいやな顔一つしない、あゝよしよしと彼はいひ、いまして遣るぞと受けあつた。彼が郷里で官邊の仕事をうまく勤め上げたことも、この忠實で勞を惜しまざる氣輕さがさうさせたのであらうし、一つの仕事を丹念に仕上げる根強さが昇進させたものであらう、或る抽出がどうしてもしまらない、奥の方でこつつりと應へてしまらないことがあつた。それは抽出の止めが奥の方でねたためであらうと查べ

ても分らなかつたが、をぢはすぐいつた。抽出の底板にくるひがあるのぢやないかと、そしてその注意どほりにやはり底板にくるひがあつたのだ。誰かが指に傷をつけると赤ちんから繻帯まで一通り用意してゐて、ほら赤ちんだよといつて薬をつけた。灰三の家に来るのにもそんな用意してゐるくらゐであるから、旅行なぞに手ぬかりなく何物をも用意してゐた。お茶が好きだつたが度たび淹れかへると手で制して、晩はお茶は晝間の分を煮出せ、淹れかへないで煮出せ煮出せと、氣の毒がつて遠慮していつた。

「をぢ貴、煮出すかね。」

朝吉が笑ひながらこれもお茶好きで、何回となく淹れ代へたので極り悪くさういふのだが、をぢは面白さうにいつた。

「煮出せ、煮出した茶は一段とうまいぞ。」

そしてそれらは新奇に淹れかへたお茶であつたが、灰三の前ではあり朝吉の失態になることを避けていつた。

「お茶は煮出してもうまいなあ。」

金澤で魚がとれるのに自ら季節があつた。蟹の時分は蟹とかはたはた鯛とかだつたが、鯛の季節は鯛ばかりであつた。それを搬んで來ても、自分は少しも食べずに灰三の家族にたべさせた。わしはいらん、わしはいくらでも金澤で食べるからいらんといつてゐた。

「をぢ貴、金澤のでつかい鯛が食べたいなあ。」

「よし、持つてくるぞ、びかびかな奴を持つて來るぞ、鯛は千圓しても、鯛は千圓はせんからなあ。」

「焼くとうまいなあ。」

「春の鯛がとれないと北陸の櫻は咲かないさ。」  
をぢはまた鯛をねだられると、それを搬ばないでゐられない、そして三子は絲とか小間切れの布とか、針とかをさがして來てくれとせがむのであつた。

「絲と針か、そいつあ弱つたなあ、だが、さがして見よう。」

そしてそのをちは納屋にはいると、幾日もはいつて中をしらべ、整頓して行つた。三年間に亂れた大納屋は滅茶苦茶であつた。けふも納屋かといふと、いやはや納屋の中はまるで鼠の巢のやうに亂れて、何處から手をつけていいか分らない、空欄は空欄、古傘は古傘、雜誌と本は一纏めにしたが、一體あんなに澤山の煉炭がよくあつたもんぢや、あれかい空襲最中に近所から納屋に煉炭をしまつてあるさうだから、土に埋めるか棄てるかどうかせいと抗議のあつたのはあの煉炭かい、それにしても何處の何奴だらう煉炭のあることを喋つたのは誰だらう、煉炭の百や二百あつたつて焼けるなら、それに關係なく焼けてしまふんだ、何も他人の家の煉炭なぞ氣になくともいいのに、狼藉者ぢや、それから庭につかふ如露が三本出たぞ、いまどき如露もないから大事にせんけりやならん、茶筒が八本、お茶のはいつてゐるのもあつたが、お茶はくろすんで匂ひがなかつた。棕櫚繩麻繩して紐に絲屑にぼろの一反風呂敷が五枚も出たが、あれも庭の手入れに木のゴミを受けるために地面に敷いたものぢやらうが、植木屋のごむ足袋のあとに残り松の枯葉まで包まれてあつた。何

より驚いたのは子供の靴が二足とフェルトの上等な舶來の帽子が二つ出たが、この黒いエナメルエナメルの編上げは三子の十歳くらゐの時にはいたものだらうが、輕井澤で買ったものらしく、アメリカ出來の立派な靴ぢやないか、おい三子さんちよつと來てごらん、あんだこの靴をはいた覺えがあるでせう、こんな靴をはいた時分もあつたといふことは、何時まで痒いところに手のとどくやうな感じのものだ、そのほかに灰三さんがいい年をしながら蟲を飼つた籠が三つ、鳥籠は天井にならべて吊つて置いたが、鳥籠だけは妙に中にゐた小鳥をちらつかせるのは、編竹が目によれて映せんがあるからだらう、金屬製の鳥籠ばかりであるが、いづれ何鳥かを飼ふのもよからう、犬の鎖は目に立つところに吊つて置いたし、ハリガネは巻いて鎖のとなりとなりに結へて置いたが、中國の算段そろばんに朝鮮物の抽箱や竹の彫のある茶筒や古鐵瓶、經机、古火鉢に紫檀のこはれ物の一束、あれはあんな納屋に置くのは勿體ないぢやないか、簾も葎あしからみすから大東がいくつもあつたが、みな英産で巻いて埃がくひこまぬやうにして置いた。それから古原稿が石油箱に一杯あつたが、皆よそから送つて來て

読んで貰ふためであつたらうが、日附で古いのは七年も前の分があつた。何とか返すとか燃すとかしたらどうだらう、燃すにも燃せないと君はいふが君としたら信頼して送られた原稿であるから、燃せないのも當然であらう、わしなら読んで返すものならきちんと返してしまふがなあ、君にそんな暇もないのであらうが戦禍を逃れた原稿もまた縁なきにしもあらず、それから門の扉を作るための用材が柱二本を加へて一揃ひあつたのには、庭のことになると用心が深いのにほとほと感心した。手洗の杓も用意なく棚の上にあつた。

をぢは納屋から出てくると、うまさうに刻みを一服喫んできて和々していつた。

「この家に無いものがたつた一つあるね。」

灰三も庭の憩みどころである柿の木の下縁臺に腰をおろした。

「無い物つて何かな。」

「郵便受だよ、あんなに澤山郵便が来るのに郵便箱は出した方がいいぢやないか。」  
「氣が付いてゐるんだ、けれども中々出来ないんだ。」

をぢは、その翌日から勝手の土間で板を削り出した。鉋は鉋といふ名のつく代物ではないし、鋸はがりがりと石で缺けたやうな奴であり、そんな古錆物は使へたものではなかつた。けれども、をぢはそんな鉋で板を削りはじめたのだ。櫛の缺齒のやうになつてゐる鉋は刃のあるところだけ三筋四筋くらゐしか、細い削り目を立ててゐないのにをぢはそれを根氣好くつかひこなした。いまに大工さんに作らせるから打つちやつて置くやうにいつても、大工さんは大工さ、郵便箱くらゐなんでもないさ、をぢは板切れをがりがり削つて、その日一日は暮れて行つたが、根氣の好いをぢは次の一日も朝からやりかけたことを遣り直し削り直しては、晝前ぢゆうかかつても板は削れなかつた。それにも拘らず切れない鋸や鉋の悪口をいはない、一體、そこまで行くと根氣が好いとか何とかいふものではなく、腕力で板を削つてゐるやうなものであつた。日が暮れて夕食の時に朝吉はいつた。

「郵便箱は何時出来上るの。」

「まア明日ぢゆうには出来上るね。あれが済むと膠仕事を遣らう。」

をぢは、かねて灰三の托んでゐた膠付をする心算らしい、木彫佛のこはれや、紫檀物のゆるんだ棚や箱、抽斗物のこぼれなどの繕ひのことをいふのだ。

「それが済むとお立ちかね。」

「かへりに信州に寄つてから歸るが、こんども遂々一ヶ月になつて了つた。」

をぢは、郵便函を仕上げると垣根に結び付けたが、板の合せ方、函の寸法にもくるひがなく、灰三の言分ではないが郵便函まで作つて貰はうとは思はなかつた。だいたい、しつこくお世話になつたといふと、なほに、妹はああしてご厄介かけ通しだし、このくらの事は何でもないといつた。

をぢは、ふと庭に出て、白山吹の株のそばに寄つて、これは二三本剪つてもいいんですかといつた。あと四五日くらゐで咲きさうな白山吹は、點々として乳がこぼれたやうに青い枝をかがつてゐた。

「いいよ、持つて行くのか。」

「うん、それから馬酔木も一枝、細辛の芽も少し貰はう、どうせ輕井澤に寄るん

だから東京の春を知らせて遣りたい。」

「それちや杏も一枝持つて行つてくれたまへ。」

「信州と此處ではまる一と月ちがふね、輕井澤では木の芽など見たくてもなかつた、木の芽どころか氷つてゐるくらゐだからね。」

「輕井澤は札幌より寒いらしい、あんな處に三年もじつとしてゐたんだが、やはり年齢が手つたつて落著かせてゐたんだね、尤も何處に行つても、いまの日本では面白い處も陽氣な處もないからね、金澤はどう？」

をぢは手をふつて昔の松の苔の都も、いまはまるで菜ッ葉作りで、どこも、ここも種物の畑ばかりで、杏や李の花の匂ひをふくんだ風のかはりに、悲しいあたらしい人糞の臭ひが、こはれかけた築地の塀をもれ土塀の穴から漏れてゐた。

「金澤も昔の氣風がなくなつて人が悪くなつたね、戸締りをして寝るやうになつたからな。」

をぢは、自分で草花をまとめると、せめて妹に庭の草木の消息をもたらすつもり

らしく、庭の草木の梢枝に綿をあてがひ、綿に水をふくませてゐた。灰三は三年間に一度も庭の花を見たことがなく、誰もそのやうにしてくれる人はなかつた。やはり親身はちがふと思つた。

「ぢや、また用事があつたら電報を打つてくれれば直ぐ来る。」

をぢは、かへりは豫定どほり信州に立寄つて色々灰三の妻に報告する考へらしく、態々軽井澤に下車することなど、何の氣苦勞もないらしかつた。三子が見送りに行くといつても、そんな詰らん時間をつひやさないがいい、おれは一人で出掛けた方が氣樂だと、リラクを背負ふとうしろも見ずに大森にある九十九谷の坂を上りながら立つて行つた。

## 後記

近作のみを集録した。この時代は何を見ても、その現象は小説的であり深く衣食生活にもとを發せざるはない、そして個人的の悩みといふものも、日本といふものが初めて眼を開かされた時代であるから、入念な洞察によつてここまで孰れは來なければならなかつたものを、三百年くらゐ前から歴史的に眼を凝らす必要がある。明治以來の一大傾斜面が、やつと見えて來たといふことは甚だ迂濶な話であらう。

私の作品はかういふ問題には、正面から打つかつてゐない、打つかる必要もないのである。併乍、これらの作品はその一大傾斜面のすその方にあることだけ分ればいい、日本だけが運命の外でくらすことができると思つてゐた曇昧さは、それに先立つて考へたことのない人間にとつては、いまだにくされた曇昧さが存在するのであらう、各



8082

篇は又そんな問題にはふれてゐない、併乍、作品のふれるところの深さはいかなる問題の複雑さをも、つねに併せて解きつつあることを人びとは同時に知るべきであらう。

昭和二十二年七月

著者

昭和二十二年十月一日印刷  
昭和二十二年十月十日發行

世界

定價 八十五圓

著者

室生犀星

發行者

森卯一郎

印刷者

川口芳太郎

印刷所

東京都港區芝三田豊岡町八  
圖書印刷株式會社

配給元

東京都千代田區神田淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社



發行所

東京都千代田區  
内幸町二ノ三(幸ビル)

東京出版株式會社

振替東京五〇二五番  
電話銀座(57)七三九二番

終



Small vertical text on the left edge of the book cover, likely a library or archival stamp.